俳句雑誌

水明

2024　8月号

令和六年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七巻第八号

《今月のかな女》

母歩く庭と思ひぬ盆の月

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

自宅の庭で、陰暦七月十五日の月を眺めているかな女。盂蘭盆の夜であるから、特別な感慨をいだいているのであろう。今、かな女の居る庭を、自分と同じように歩いていた母の生前の姿を思い描き、感慨にふけっている。まるで母が自分の隣に居て、一緒に盆の月を仰ぎ見ているような気持になっているのであろう。「思ひぬ」に、その時のかな女の心情が明示されている。

（鬼之介・註）

水　明　第1127号

今月の巻頭句

季音雪　山葵田に映りし山を手で崩す　大村節代

季音月　路地風鈴ひとり通れば一つ鳴る　渡辺舎人

季音花　時の日の生き生き告ぐる鳩時計　横山君夫

水明集　炭団坂登る下駄音夏近し　菅原真理

鼓笛集　夏浅し富士の農鳥顕るる　反町修

山紫集　母の日や暗緑色の茹卵　内田恵子

水明

令和６年
８月号

今月のかな女　山本鬼之介　1
今月号の巻頭句
紘の妙（作品）　小倉倭子　4
尽きる（近詠）　鳥羽和風　6
三方五湖（近詠）　正木萬蝶　7
煌星　8
ゆずり葉　檜鼻ことは　10
※雪欄作家近詠鑑賞
※季音月評
季音「雪」（同人作品）　大村節代　小倉倭子ほか　12
季音「月」（同人作品）　渡辺舎人　梅澤佐江ほか　19
季音「花」（同人作品）　高島寛治　横山君夫　河野はるみほか　24
『水明誌』を繙く　杉本青三郎　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30
☆新珠賞受賞者ノオト　32
○自選二十句　菅原真理
言葉を編む　丸山マスミ

○自選二十句　佐々木史女
春風　浜名勇
俳誌望見　染谷風子　40

水明集　菅原真理　新暦文　岡田宣子　ほか　42

作品鑑賞　山本鬼之介　54
水琴窟（水明集七月号鑑賞）　池田雅夫　58
鼓笛集（同人作品）・私の一句　60
句集喝采　曲淵徹雄　41
山紫集　64
水明例会報・各地句会報　70・73
水明競詠・りんどう忌のご案内　77・78
風声・発展基金御礼　78
後記

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

絃の妙

山本鬼之介

民草は「くさ」にはあらず遠青嶺

千年の杜を敬ふ青嵐

晴ればれと独居らうじん星祭る

二上りやいま風鈴の本調子

羅の羽織を恋ふる衣紋掛

口は大砲(おほづつ)庭まで飛ばす枇杷の種

草笛の「りんご追分」岩木山

島唄はことばを紡ぎ夏の月

尽きる

小倉倭子

故郷の紀州紀ノ川鮎自慢

鮎解禁釣竿撓ふこころ舞ふ

釣り上げる鮎の美形よ銀光り

鮎好きの夫は跳ねすぎ背骨折る

紀州焼き鮎の塩焼き見舞とす

銀衣旬なる鮎の姿焼き

わが里は両国花火戦火消ゆ

本年度の全国大会句の応募期限を、心身上の病みを以て出句を逃してしまった。水明入会以来、この様な事態に至ったのは初めてである。悔しさが今になって募る。

嘗て、俳句や文章等で夫の事柄を詠み書きした覚えはないが、大会句出題の「鮎」に引き寄せられ「作品七句」に出句提出させて頂いた。紀州紀ノ川の鮎は紀州人にとって格別の様である。釣りは故郷の鮎のみ。骨折は、一寸した勢みで釣りの所為ではない。

三方五湖

鳥羽和風

見霽かす薔薇山頂に五湖の風

口細は五湖の顔なり鰻飯

年縞の帯の館に虹の帯

年縞に母の俤秋袷

落葉期七万年の帯館

小春日や五湖に異なる湖の色

たたき網しぶきも五湖の冬景色

三方五湖は水質や水深の違いから五つの色を見せる湖です。梅丈岳の山頂にはレインボーライン山頂公園があり百以上の種類のバラが見事。テラスからの三方五湖と日本海の絶景が四方八方から圧倒的な自然のパノラマとなって押し寄せる。五湖の湖畔には年縞博物館があり名勝三方五湖の一つ水月湖から採取した縞模様の年縞を展示した世界でも珍しい博物館です。因みに年縞とは一年に一枚ずつ規則正しく積み重なったシマシマ模様の地層の事で世界一の長さを誇る四五〇メートル、七万年分の年縞をステンドグラスにして展示してあります。又三方五湖の鰻は口細青鰻と呼び五湖一帯に広く生息しエサも豊富で美味。冬の風物詩として知られるたたき網漁は青竹で激しく水面をたたいて鯉や鮒を取る漁法。

煌星

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　正木萬蝶

◇ピアノ発表会（五月号）　島津初花

春浅し野に一点の黄のひかり
つくづくし幼児の両手を零れけり

元日の夕方、久々の帰省で一家又は一族団らんの時に起きた地震。能登の方々には申し訳ないが若狭や小浜は甚大な被害を免れて安堵した。それから数ヶ月、正直に季節は巡って野山に春の兆しが表れた。たんぽぽであろうか。陽を浴びてぽつぽつと足元で輝いている。幼い手で摘んだ土筆は笑顔と一緒に籠いっぱいに溢れている。それを眺める作者の優しい眼差し。数年、いや数十年後に思い出となる大事な一コマであろうが幼い手はまだその事に気付いていない。

大ホールに春着のキッズコンサート
発表会飛び出す幼児に春の曲
春浅しふはりドレスの女の子

さあ、晴れの舞台の幕が開く。それぞれにおめかしをして順番を待つ。名前を呼ばれ元気にグランドピアノへと飛び出す。作者の二人のお曽孫ちゃんの晴れ姿だ。上手く弾けてもちょっと失敗してもご愛敬。見守る方はハラハラドキドキ。女の子はお姫様のように優雅に、男の子は蝶ネクタイかしら？作者の元気の源のご家族の絆でこれからも地域や水明でのご活躍と人生を存分に楽しまれますように。

◇高輪ゲートウェイから（五月号）　境延昭

春日燦ゲートウェイに駅ピアノ
名苑に新婦がポーズうららけし

古来より江戸の玄関口であった高輪大木戸が高輪ゲートウェイとして蘇った。駅名の公募で百三十位だったそうな。かの隈研吾氏の事務所が手掛け、外から見ても構内も斬新な駅である。外は春の陽射し、駅のピアノは誰を待つのか。今は時間を持て余すかのような佇まいである。

八芳園は言わずと知れた結婚式場であるが一般の人も庭園を鑑賞できる。女優さながらの新婦たちが行き交い、新郎は付き従うのみ？晴れの舞台はいつも女性が主役である。そんな光景に昔日の自分を重ねた作者を思った。

春の水日差しの中に鷺一羽
春昼の門前で食ふ鴨南蛮
梅園の数寄屋に錠のにじり口

自然植物園は旧白金御料地として園内は天然記念物及び史跡の指定を受けている。一幅の日本画のような眼福を得て心地よい春の途中に居る。数寄屋の錠は茶会の時には外されるであろう。鴨南蛮で身も心も満たされ、変わって行く街を帰路へ。嘗て企業戦士であり高度成長を支えた若かりし頃の作者を想像した。今もそのダンディの片鱗が伺われる。

◇江戸の風（六月号）　山中みどり

葉桜や鬼の平蔵の旧居跡
良く揃ふ手締め三社の夏祭
両国に幟はためく五月場所

メトロ菊川駅近くに鬼平の記念碑が立っている。築地より移り住み、後に遠山金四郎がここに屋敷を構えた。季語は金さんをも意識してのものであろうか。時代劇の世界が満載の本所。今年、鬼平は松本幸四郎へと代替りした。吉右衛門の色気には程遠い気がするが数年後を楽しみにしよう。

三社祭は神輿渡御を主とする浅草神社の例大祭で江戸三大祭の一つだ。コロナ禍を経て一層の賑わい、祭り髪の女性の姿はさぞかしカッコいいことだろう。阿吽の呼吸の神輿の掛け声と三本締め。江戸っ子が一番江戸っ子を感じる場面だ。

五月場所は大の里の優勝で終えた。地震の痛手のまだ癒えぬ石川県出身だ。史上最速の優勝で髷は大銀杏とは程遠くそれが初々しさを殊更に感じさせた。江戸前の風に心地よく幟が泳いでいる。千秋楽を惜しむように。

江戸前の鱚の天麩羅屋形船
餌をねだる鷗と遊ぶ屋形かな

軽くサクッと揚がった鱚の天麩羅にはビール、冷酒、水割り…何でもござれ。ほろ酔いでデッキに出れば中の様子を伺っていたかの様に鷗も相伴に預りたく寄って来る。羨ましい処にお住まいだなあ、の一言に尽きる。

◇初夏一日（六月号）　石井喜恵

風薫る思考続けるロダンの像
ストラディヴァリの音五月のコンチェルト
勇壮なフィナーレ汗にじむ指揮棒

ダンテの「神曲」より想を得た「地獄の門」の座像。後にこれを拡大独立させた像である。世界中の美術館にあり、原型はパリ・ロダン美術館にある。屋外展示を想定した作品らしい。寒風や暑さにも耐え、待望の「風薫る」の季節が来た。暫し思考を中断してゆるりとしては？と声を掛けたい。

余りにも有名なイタリアの弦楽器製作者でヴァイオリンの標準型は彼より始まった。凡人の私には音色の違いは判らないがストラディヴァリの名に圧倒され納得させられてしまう。幾つかの演目をこなし気が付けばフィナーレ。渾身の力を指揮棒一本に集めてオーケストラを支配する。あたかも格闘技の勝者を思わせる。万来の拍手を浴びオーケストラのメンバーとのアイコンタクト、安堵が伺われる。

氷菓舐め臍出しルック妥協せず
マジシャンの胸ポケットより揚羽蝶

古い！と言われればそれまでだが…。同感である。以上！万国旗や鳩が出るのは見た事があるが、蝶は見た事がない。繊細な生き物をどうやって？これぞマジック。種は何処に。片仮名が多く、そのことが軽やかさとヨーロッパの聖五月の雰囲気を醸している様に感じた。

ゆずり葉

◆季音六月

檜　鼻　ことは

切株のまだ真新らし春匂ふ　　永野史代

春の匂い、それは新しいものの始まりを予感するように心に響く匂いです。花の香り、土の香り、草木の香り、それぞれに自然界の再生を象徴しているかのようです。

野山や森を散策していると真新しい切り株に出会うことがありますが、切りたての切り株は、明るい色をしていて、その木特有の芳香を放っています。やがて、切り株は昆虫や小動物の住処となり、木によっては新しい芽がでてくるようなこともあります。春の匂いは、人それぞれに特別なものです。新しい切り株の匂いに詠者は何を感じられたのでしょうか。自然の営みに同化して春を慈しむ作者の姿に共感いたしました。

石蹴りの石は置き去り鳥雲に　　石井喜恵

石蹴りは子供のころの想い出です。集団登校の集合場所や神社の境内などで、よく遊んだものです。年齢の少しずつ違う仲間たちとの遊びは楽しく、今から思えばそのような遊びの中で社会性を培うことも出来ていたのかもしれません。意識はしていませんでしたが、鳥のさえずりや風の音、真夏の日差しなど、季節の中に身を置いて遊んでいました。

渡り鳥が北に帰るころ、雲の中に消えていく鳥の群れの姿は、自然の移ろいと命の躍動を感じる光景です。その景色の中に身を置いた作者は、子どものころの石蹴りの想い出と渡り鳥の姿をシンクロナイズし、しばしの時間を過ごされていたのではないかと想像いたしました。

寄り添ふは石碑の根元一輪草　　河野はるみ

一輪草は、春の訪れを告げる花のひとつ。毎春、探しに出かけるのを楽しみの一つにしています。小一時間ほど歩いて、いつもの場所に見つけたときは、小躍りしたくなります。どちらかというと、それほどに強い日差しを受けない湿った場

所に生育しています。

作者が訪れられた石碑は、歌碑か句碑ではないかと察しますが、石碑の根元に寄り添うように咲いている一輪草、いっそうに可憐な姿であったことでしょう。花言葉は「追憶」「あなたを守りたい」。物語を読むように、句を拝読しました。

棟上げの空まさをなり燕来る　　下川光子

柱・棟・梁などの建物の基本構造が完成し、いよいよ棟木を上げる日となりました。竣工後も工事が無事に進むことを願っての上棟式。良き日を選び、準備をされて臨まれたことだと思いますが、一番心配なのはその日の天候。せっかくの大切な日ですので、誰しもが、良き日、良き天候を願います。

この日は快晴の下での上棟式であったようで、まことにお目出度いことです。

真っ青の空を横切ってやってくる燕の姿が、上棟式の晴れの日を象徴しているかのようです。

船窓の丸き夕空雁帰る　　横山君夫

船窓から眺める風景は船旅の醍醐味の一つなのだろうと思います。多くの船窓が丸いのには理由があって、丸い形状は強度と耐久性にすぐれるため風圧や水圧から船を守ることができるのだそうです。それだけではなく、丸い窓は流線型の船体に似つかわしく、船の外観を美しく整えているような気がします。さて、船旅をお楽しみの詠者。船窓から臨む夕暮の空に、群れをなして北の空に帰っていく雁の姿は、美しく、情感を誘う光景であったことでしょう。

「私は船窓を開けて、つぶやくような波の音を聞いたり、舷にあたる水を眺めたりした」と島崎藤村は、千曲川のスケッチの中で述べています。どのような形であれ、一度、船旅というものをしてみたいと思いつつ、掲句を拝読しました。

コロッケにウスターソース昭和の日　　石田慶子

昭和、平成、令和と時代が移る中で、昭和は多くの文化的な変化や化学的な進歩があった時代でした。いろいろな課題があった時代でもありましたが、物事に対して鷹揚さがあった時代でもあり、「あの頃のほうが生きやすかったなぁ」などと思うのは昭和生まれの故だからでしょうか。

高級な三ツ星レストランよりも町の洋食屋さんのほうが、気軽に食事を楽しめるのです。コロッケは洋食屋さんの定番でしたし、おやつやお弁当のおかずとして大好きな一品でした。ウスターソースは、コロッケにはもちろんのこと家庭の洋食料理にはなくてはならない調味料でした。シンプルな掲句の措辞に、懐かしいあの時代を思い出したしだいです。ウスターソースやコロッケは、多くの日本人に愛されてきましたし、これからも愛され続けることでしょう。

季音雪

山の宿

大村節代

安曇野にショパンの調べ山葵沢
山葵田に映りし山を手で崩す
山茂る大吊橋を揺らす風
茂る草落人村に辿り着く
釣りし鯉洗膾に頼む山の宿

立ち別る

小倉倭子

沙羅の花天の明世師仰ぐ朝
導かれ野菊の会へ更衣
空の色海のいろ好き更衣
肘を張り齢あらはに更衣
立ち別れ小指を噛みて薔薇の園

夏わらび　栢尾さく子

雲湧いて去つてゆくなり針槐
レグホンの白が散らばる夏わらび
つましさの中の一服新茶の湯
枇杷の頃必ず想ふ師の一句
水底の日暮れ見にきてゐる蜻蛉

蛇　菊池ひろこ

蛇くねる残像となりてもくねる
蛇入りし叢戦ぎつづけたり
癒えたるを告ぐる胡坐や冷奴
桐咲けり素顔の若き帯姿
はるかなる水面眩しむ麦の秋

八十路坂　五明昇

薫風を簀桁に揺する和紙処
海峡に卯波が隔つ壱岐対馬
衣更へて小粋に越ゆる八十路坂
六月来チャペルに弾む婚の鐘
縄文の世に昼寝する遺跡掘り

太棹の境　延昭

庭下駄の鼻緒のゆるぶ梅雨晴間
太棹の煽るじよんがら夏旺ん
鈴蘭を濡らす朝の通り雨
蕗の葉に眠気をさそふ雨の音
火取虫かつて特攻強ひし国

二重虹

椎野 美代子

いろいろ句集面輪いろいろ二重虹
ステッキと傘を陽気に二重虹
お洒落帽ほーいほーいと二重虹
お天道さまの日箭離すまじ二重虹
小脇に句集帰心募りし二重虹

夏めく

島津 初花

本読みの花丸印蛙の子
停泊の船は真白し夏めけり
コンサートの余韻にひたる夏の月
虎の尾の花は桃色瑞瑞し
無人駅は燕の潜る改札口

大夕焼

鈴木 康世

真つ向に大夕焼を友帰る
大夕焼無尽の空を眩しめり
夢一つかなひしあとの大夕焼
大夕焼弾む話に刻忘る
四阿に碁を打つ音や大夕焼

黒南風

田寺 玲子

黒南風やドックの巨船浮き沈み
黒南風や艫綱水漬く舫ひ船
黄雀風点となりゆくフェリーの灯
青葉潮沖の泊船火を灯す
鱚舟の沖へ波切る朝まだき

黒南風　十倉和子

み熊野の黒南風すさぶ島泊り
黒南風や漁夫の朝湯の荒き音
黒南風や白波たてて救急艇
舟虫や学童ちらす岩畳
怒涛音ここまでは来ずほととぎす

片蔭　鳥羽和風

片蔭は商店街に依怙贔屓
法法と片蔭を来る僧の列
片蔭や鋸の刃のごと町工場
夏陰を一人づつ来て皆他人
夏陰や老いに優しき女坂

ホルン　永野史代

風をきる少女ひらりと更衣
糊利きし青年のシャツ更衣
樹樹と風風とわたくし風薫る
ゆふぐれはホルンを鳴らすかたつむり
ニンフも孕むらし子安貝夏の浜

紫陽花　波多野寿子

窓あけて川の音聞く梅雨入りかな
紫陽花や寺に静かな人の群れ
向ひ家が売りに出さるや白紫陽花
日暮れ来て雨に彩増す濃あぢさゐ
閨の戸を叩く淋しさ梅雨しとど

散り散りに　星野和葉

群游の目高一瞬散り散りに
駆込み寺に今日も四五人落し文
落し文拾はれたくて光りけり
鯱二尾互ひに引かれ茂りかな
もう聞けぬあの名告り声冷酒酌む

制服制帽　町野広子

故郷遥か太平洋の卯波見る
江の島を右手に置きて卯波立つ
警官の制服制帽更衣
かたつむり電柱が立ち家が建つ
ででむしや人の噂は聞き流す

彩る　茂木和子

市役所に窓口いくつ日日草
買ひ足せし土を彩る日日草
定命を知らずして生く花樗
物腰で分る人柄額あぢさゐ
母が居てその母がゐる日日草

子蟷螂　森本早苗

すくと立つタカラジェンヌや立葵
子蟷螂薄黄緑に透けてをり
腕を這ふ蟷螂の子の好奇心
青葡萄硝子の窓をカンバスに
黒南風や大吊橋は無頓着

夏兆す　山中みどり

藍染めの麻よく似合ふ卒寿かな
枝豆の莢の端切る銀鋏
鬼平と名付けし真鯉池の主
振り袖の姫の如きや錦鯉
餌に群るる金銀紅白錦鯉

箱根湯本富士屋ホテル界隈　網野月を

夕螢一番星を待ち出づる
葉隠に螢死ぬことと見つけたり
来世は山に生れたき螢かな
ほうたるに甘露すすめる蛇の声
人声に消えて無くなる螢かな

六月　石井喜恵

学食のおすすめランチ風薫る
付き合ひは即かず離れず古茶新茶
結局は自慢話か新茶汲む
六月の軽く転がすピザカッター
蠅叩小銭ばかりの貯金箱

草笛吹く　井上燈女

味噌つ歯の子なれど草笛うまく吹く
草笛や老いて唇若からず
独り居の半丁で足る冷奴
富士山の湧き水に透く新豆腐
燈台は雲湧き易き夏の潮

次の間　石山かつ子

息弾ませて少年駈くる兜虫
中標津は広き草原夏の雲
どくだみや母の使ひし大薬缶
次の間に隠し部屋ある梅雨の宿
喜喜として巣立燕に朝の空

梅雨茸　大橋廸代

青天を翔くる一ひら白き薔薇
閃々と親を後方に鴨の子ら
黒南風や難民あがる荒磯島
雨をんな光る梅雨茸見にゆかむ
白南風やリヤカーあまた待つ大漁（たいぎょ）

特集　忌日季語のあつかい方
巻頭エッセイ　長谷川　櫂／十氏による忌日季語の解説
巻頭作品10句
高崎公久・山田貴世・染谷秀雄
清水　伶・中川雅雪・伊藤伊那男
原　朝子・山田佳乃

俳壇
9月号
8月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
佐々木幹郎
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅳ期〕……島村　正・和田順子
特別寄稿……中村和弘

新連載
明日への俳句……野名紅里
季節の移ろい～二十四節気……大高霧海
俳人の住む町……辻　美奈子・井上論天
私の本棚・私の一冊……山田真砂年
旧派の俳句……秋尾　敏
知ってるようで知らない俳句用語……井上泰至

連載
俳句と随想12か月　石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

季音月

風鈴　渡辺舎人

江戸風鈴裏文字に母恋ふる歌
一撃の南部風鈴軒の端
路地風鈴ひとり通れば一つ鳴る
電柱に誰が掛く風鈴鳴り通し
風鈴の音のうちつづくアーケード

行人坂　梅澤佐江

城跡を八方攻めに田水張る
蛇入るや青き戦ぎの潦
蝸牛潰さぬやうに雨意の径
名刹の風鐸の音や青嵐
焔立つごと行人坂の極暑かな

螢火　高島寛治

蕗の葉に身を隠したる石仏
六月や草の匂ひの綾瀬川
暮れ残る夏至の連山眼前に
手のひらは優しき器初螢
螢火や母に抱かれて居る写真

昼寝覚　大場順子

昭和の世に忘れ物して昼寝覚
揺り椅子のいつかゆりかご昼寝夫
夏の月浮かべて酌まむ夜光杯
潮騒に和する琴の音月涼し
裸の子太平洋へまつしぐら

夏川　松井由紀子

六月の雲はずしりと山憮然
添書に旧仮名ひとつ山の蕗
鴨の子のしんがり転び落つ野川
螢火や細き流れの在りどころ
夏川の淵へ投網のひかりかな

合せ鏡　丸山マスミ

磯笛を浜に寄せ来る卯月波
身の丈に合はす縫針更衣
くちなはのうねる光や神の庭
夏川を引き込む宿の手打蕎麦
羅や合せ鏡の照り返し

母屋の朝　正木萬蝶

さみどりに新茶ふくよかなる母屋
昼寝覚いまはむかしの京の寂
彫物の透けし背中や三尺寝
くちなはや我に添ふかに躙り口
風薫る道に背きしことあれど

君影草　森川義子

例刻に点る外灯夏館
竹垣の結び目新た君影草
薫風や民話の宿の遠景色
鳴るはずの目覚し鳴らず明易し
廃線の鉄路の荒び青嵐

紫陽花　松宮保人

群団を此地に呼び込み螢狩
大輪の色滴るや濃紫陽花
英霊殿四阿より四方に五月雨るる
浴衣着て大社詣でや異邦人
杉玉や試飲に惑ふ夏館

青嵐　内田恵子

青嵐抱ふる画布は帆となりて
大南風横断歩道揺れ動く
少年につむじが三つ南吹く
里山の茂り裾野をゆく葦毛
青田風古民家カフェの開店す

雷烈し　池田雅夫

七月の心気一変窓全開
日盛の路よれよれのアスファルト
隧道の反響音や雷烈し
町工場の若き職人汗光る
定まらぬ酔歩の家路夏の月

夏館　荒井倶子

更衣つんつるてんの嬰の服
菩提寺に名代の古木青嵐
火を恋ふは汝のみにあらず火取虫
夏館青児の女立たせたし
夏館追憶つねに新しき

走り梅雨　井上玲子

走り梅雨昏れなづむ空水色に
青嵐湖畔に凜とたつこ像
青嵐戦場ヶ原駆け抜くる
渓流の水照りにふるる濃紫陽花
冷奴ほろ酔ふほどに姦しく

応接間　近藤徹平

蘭鋳は不愛想なり応接間
金毘羅へ石段二千瀬戸は夏
困民党蹶起の神社蟬時雨
不器用な前座の枕茹だる夏
病葉の浮かぶ水面や逆さ富士

旅の途中　福田千春

ひと筆書きの証拠残してかたつむり
かたつむり旅の途中や我もまた
夏めくや入院服の淡き色
塩揉みの香の立つ厨風薫る
蛇落ちて弁天池をざわつかす

万緑　大塚茂子

万緑と長谷の大仏相照らす
小流れに蜥蜴の走る細濁り
手を拡げ濁流となる夏の川
折鶴を柩いっぱい夏の旅
手術終へ常のあかりよ冷奴

ざり蟹　山田美佐尾

少年の宝物とや蝸牛
綱を引く左右に別れ青嵐
ざり蟹を糸垂らし釣る少年期
練り歩く仮装行列夏祭
俳優は仮の名前ぞ夏館

柿の葉寿し　野口和子

梅雨入りや身体に馴染む古タオル
単線の駅舎ぽつりと向日葵と
窓覗くホバリングして夏燕
桜の実払ひて座る木椅子かな
父の日や柿の葉寿司の整列す

梅雨晴間　川崎道子

黒南風や空のトロ箱にほひけり
青梅もぐ紺の作務衣の背負籠
聞きほるる野外演奏蚊に刺さる
夕薄暑あへぐポンプに迎へ水
梅雨晴間ネクタイ赤き勝負服

黒南風　西浦千枝子

紫陽花や祈祷師の庭はなやかに
栗の花鼻をつまみて登校児
黒南風や帽子目深に医者帰り
笹百合や鎮守の森に灯をともす
花の名を知りて楽しく庭手入

涼し　松山清子

五百羅漢紫陽花山のふところに
青葉光まとひて子等の鬼ごつこ
雪の下こんな所に喫茶店
手捌きに歓声上がる鵜飼船
登りきて港の見ゆる丘涼し

嫁入舟　熊倉千重子

青楓揺れて園庭水鏡
嫁入舟ゆくよ水郷花あやめ
大海を知らずちんまり目高どち
低音の読経沁むるや寺涼し
季の乱れ言ひつ一箸冷奴

花菖蒲　上戸千津子

しつとりと「光源氏」名花菖蒲
時の日の登校の声未知の星
山の端に五重の塔や柿の花
往き来する人も仰ぐや釣しのぶ
黒南風に漁村列島打ち沈み

夏の夜　日高道を

夕立去り残り香失せし四畳半
夏の宵闇に紛るる恋心
指折りて字余り削る夜半の夏
葭切の寝静まりたる夜更かな
早明くる北の大地の夏至の朝

後期高齢　青木鶴城

梅雨晴間空缶はどこに捨てやう
灯取虫ビル街は夜のプリズム
老老男女の眼科待合夏至の夕
短夜や身の上話は眠らない
半夏生後期高齢てふ舞台

小椅子　檜鼻ことは

せせらぎへ晒す右の手柿若葉
訳もなく薔薇はつぼみのころが好き
五月雨やもう一合をつける店
十薬や小椅子に安堵する暮らし
湯あみして八十八夜の喉仏

螢　飛永鼓

夏めきて手に取るやうな隣家かな
夏きざすあけひろげなる我が心
手の平に光を包む螢狩り
螢狩り源氏平家と呼び交ひて
この村は自慢の水よ螢狩り

とかげ　原田秀子

青とかげ太古知りたる顔をして
ちらと見て電光石火とかげ消ゆ
青とかげ在所はこことしたり顔
届けたし草笛の音佐久までも
今風にバジルソルトで冷奴

☆

☆

季音花

鳩時計　横山君夫

夏の月腰掛石に余熱あり
やはらかに闇を切りゆく螢かな
洋館の出窓サボテン花ざかり
時の日の生き生き告ぐる鳩時計
香ばしき杉箸使ひ冷し麦

生きとし生けるものの夏　河野はるみ

浅き寝の夢に誰やら時鳥
木洩れ日に色を与へて青嵐
蝸牛葉裏密談進行中
池渡る蛇自由形平泳
夕立や八艘飛びで帰路急ぐ

恋螢　染谷風子

混浴の山の露天湯葭簀張
湯上がりの美人がによつと青簾
火蛾狂ふ八百屋お七の恋のごと
並走の雨の外苑椎落葉
自分史に空事少し恋螢

能登　渋谷きいち

過去形で能登を語るな夏の雲
仮設に灯能登はやさしやあいの風
Jアラート鳴るや泡ふく磯の蟹
沢蟹の歩み止めたる登山靴
目で追へぬ憤怒の流れ出水川

憶ふ人　曲淵徹雄

二人には広き食卓柏餅
新緑や風を握つて拳を打つ
走り終へ遠き眼差しダービー馬
上人の笠に弾むや夏落葉
夕間暮れ水打ちながら憶ふ人

宿の下駄　保坂翔太

空を衝く空手の演武青嵐
銭湯の牛乳一気夕薄暑
螢火や水路に嵌る宿の下駄
境内の「はないちもんめ」君影草
枝蛙琵琶湖を海と思ひけり

夏暖簾　笹本啓子

盛り塩の飾る店先夏暖簾
梧桐や旧家に遺る長屋門
紫陽花盛ん旧街道の標石に
鳥居潜れば神木のごと夏木立
累代の当主の写真夏館

女船頭　石田慶子

蛇好きのあの娘の今は飼育員
入口の演目みつめ夏芝居
夏暖簾掛け替へてある老舗宿
五月闇時計二度見る喫茶店
新人の女船頭風薫る

胸の内　野田静香

水に浮く神籤の仮名や新樹光
仮橋に命の重さ梅雨出水
骨董を愛づる理髪師日の盛
天つ風百合の香残し墓碑を去る
冷し酒グラスに注ぐ胸の内

濃あぢさゐ　石川理恵

重きもの背負うて人もでで虫も
かたつむり葉ごと揺られてをりにけり
土砂降りをゆつくり急ぐかたつむり
映り込む事件現場の濃あぢさゐ
父と子の相似形なる昼寝かな

桐の花　宮﨑チアキ

さはさはと薫風過ぐる裏通り
物議をかもす政治献金五月闇
悲し気な騏驎の眼日日草
流行へのこだはり疾うに更衣
単線や桐の花咲く嫁の里

若大将　松島寛久

五月雨の上りて墓に千の風
昭和が好きラジオのひばり蚊帳の中
青春の映画は夏の若大将
五月雨るるしばし軒借る家路かな
冥界の子らも遊び来る螢狩

風薫る　鈴木玲子

薫風や銅鑼の音にぶき奥道後
かたつむり生くどんでん返しなき道を
葉から葉へ大きな伸びを蝸牛
江戸遠し象の山車行く日本橋
冷静なる遺伝子欲しや夏の月

梅雨選挙　瀬戸雄三郎

梅雨晴や女性候補の白い服
長梅雨や玉川上水水見えず
傘差して傘を返しに梅雨長し
いちはやく梅雨入りを知る頭痛かな
思ひの外背中が熱し梅雨晴間

海街見ゆる　野村美子

夏夕焼海街見ゆる「祈念坂」
梅雨の日の坂道発進教習所
高原の阿蘇の鈴蘭五万株
薬膳の嵯峨野の店の夏暖簾
夏木立静けき朝の五色沼

初螢　髙橋満耶子

黒南風やじわじわ上る海水温
飛べぬまま逝きし小鳥や都草
幽玄の世界へ誘ふ初螢
大螢に案内されたる舞踏会
頭の重き雨にうなだる濃紫陽花

汗の染み　田中章嘉

危惧と言ふ位を貰ふ目高かな
大勢の小花が笑ふ額の花
揚羽舞ふ金柑の葉に卵産み
蓮の葉に光り転がす風もきて
下着替へ二日ともたぬ汗の染み

火取虫　野平美紗子

小夜更けて受験子の窓火取虫
火取虫羽を開きて休みをり
夏暖簾掛けて我家の模様替へ
正面に富士を仰ぎて帰省かな
旧友と過ごす一日や夏の海

紫陽花　葛城千世子

ゆつくりと古紙抱へ来る夏帽子
学校へ欠席電話額の花
おはやうと今日も挨拶夏燕
講習の準備ととのひ濃紫陽花
駅ピアノひたすら弾くや七変化

十五の夏　梅澤輝翠

海風を受けて科佳き夏暖簾
冷酒酌む切子グラスに映る海
玉葱や十五の涙俎板に
屁理屈をこねる十五の夏休み
姉さまの正目美し踊り下駄

小さきは　越田栄子

蟻の列地下大国へ続きをり
「見いつけた」そ知らぬ顔の子蟷螂
足あげてちよろりとポーズ蜥蜴の子
じつとりの闇に蠢めくなめくぢら
母の指つかむ稚の手風薫る

蚯蚓の鳴き声　寺内洋子

蚯蚓鳴き魚釣り準備怠りなし
蚯蚓鳴く愚痴連ねたる日記かな
雨しとしと蚯蚓鳴くかと澄ます耳
雨続くみみずも地球の一住民
あぢさゐや面目躍如雨女

夏を謳歌　西幅公子

山小屋の丸寝の鼾明易し
輪唱のボーイソプラノ夏木立
電柱に群がる万の火取虫
雨上がる這ひて丸太を夏の川
夏燕里へ通ずるこの古道

たかんな　森和子

たかんなや活断層の潜む山
筍の地の罅割れを掘れといふ
たかんなを剥く戦争の記事の上
夏館築百年の梁の艶
夏館鍵のかかりし奥の部屋

さくらんぼ　山戸美子

容器さへ宝石のごとさくらんぼ
夏の夜の血圧計の加圧かな
梅漬くや塩の加減にあたふたと
約束の土産は確とさくらんぼ
十三の叔父に馳せるや原爆忌

夏の空　綿貫ひさの

水槽の隅に溶けゆく海月かな
本当は宙で飛びたい海月かな
炎昼やプラネタリウムは星の夜
駅中で甘酒駅弁旅気分
夏の空かな女の句碑と落羽松

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年9月号

特集 世界の「芭蕉」を追う！
○芭蕉はなぜ世界で一番有名な日本人なのか　堀田季何
○芭蕉HAIKUは何が魅力だったのか　マブソン青眼
○芭蕉の句セレクションとエッセイ　ラーシュ・ヴァリエ
○西洋詩から見た、芭蕉句の新しさ　奥坂まや

〈グラビア〉俳句界NOW　長浜勤

特集 私が愛する「一品」
稲畑廣太郎　福神規子　碓井真希女
中原道夫　小島健　遠藤由樹子
福永法弘　細谷喨々　辻村麻乃
藤原暢子

●山本健吉評論賞奨励賞受賞者の新作評論！
やまだようこ「俳句におけるメタファーと詩的現実―芭蕉の句をもとに」

【注目の句集】工藤義夫『舷窓』
鈴木久美子『雪降つて降つて』

※セレクション結社「雲の峰」朝妻力

私の一冊　羽村美和子「ペガサス」

「俳句界」投稿欄　一流選者11名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』を繙く（水明六月号）

杉本青三郎（埼玉県現代俳句協会会長）

遠き日の手紙を千切り遅桜　小倉倭子

何とも複雑で不思議な感じにさせる作品である。季語の「遅桜」は、一斉に咲いて一週間くらいで潔く、慌ただしく散る桜にとって、少し遅くまで咲いている桜は、それだけで感謝したくなるような嬉しくなるようなプラスの存在であろう。それに対して上五中七は、どう考えてもマイナスの行為である。「遠い日の手紙」とは普通に考えれば、親類や大切な人から届いた手紙であろうし、飛躍すれば、若き日に自身が書いて出さず仕舞いの恋文かなにかであろう。

昔むかしの手紙を整理するのは、身辺整理かはたまた終活の一環なのかもしれない。しかし、「千切る」という行為は、必ずそうしなければならないという、強い義務感が感じられるのである。千切って、何が書いてあったか全く解からなくしなければならないと言うことは、自分以外の目には晒したくない内容でもあり誰の手も借りたくないのである。にも拘らず、季語の「遅桜」よって「千切る」という行為が、飽くまでも崇高で儀式のような大切な行為に思えてきてならないのである。

山吹の黄に焦れつつたそがるる　永野史代

山吹の句で好きな作品をあげれば、「ほろほろと山吹ちるか瀧の音」（松尾芭蕉）、「空腹の自転車が逃げてゆく山吹」（三浦北曲）、「山吹が咲く老人は光るこけし」（吉田透思朗）等であるが、この作品には深い抒情を感じるのである。

人は誰でも、「こういう人になりたい」とか、「こういう人のような俳句を作りたい」とか、「こういう人と付き合いたい」とかいった希望とか憧れとか、もっと言えば、目指すべき目標を抱きながら、多かれ少なかれそれに少しでも近付こうとして努力するものである。それが届くはずのない高い目標であっても、少しでも近付いていこうとするのである。作者にとっては、山吹の黄色の美しさが、言ってみればこの喩えの一つであったのではないのであろうか。しかしながら、幾ら努力しても、届かないものは沢山ある。いつの間にか、時間だけが経過し、人生の半ば以上は過ぎ去り、黄昏時を迎えているのである。それでも尚、（恋い）焦がれる憧れは、弱くなることはなく、未だに少しでも憧れに近付きたいと、日々一歩一歩進んでいくのである。

現代俳句鑑賞

網野月を

みちのくの蝶小さしと口にせず　西山　睦

（『俳句』6月号・からうじてより）

座五の「口にせず」が作者の言わんとするところであろう。南国産の蝶に比すれば小ぶりであろう「みちのくの蝶」なのであるが、作者はふと思った「小さし」を声に出すことを「かろうじて」押しとどまったのである。蝶への作者の思いやりの心である。他に「引き返すには来過ぎたる絮たんぽぽ」「小舟へと梯子の軋む春日傘」がある。

父逝きてパラパラ漫画めく春よ　佐怒賀正美

（『俳句』6月号・春より）

中七から座五にかけての「パラパラ漫画めく」がお父様を失ったことの心境を表現しているわけだが、筆者はその空虚な心持を表現していると解した。他に「ガザの民に春ぜんぶあげたい」「三鬼忌の食へざる星と食へる月」がある。

つばくらめそこは貧しき詩人の家　大谷弘至

（『俳句』6月号・澱河より）

燕はよく人家に営巣する。軒下や時には屋根裏にまで入り込んで営巣する。そして営巣した家は幸多き家であると言い伝えられている。この「詩人」とはどなたであろうか。

腕に傘かけムスカリの下り坂　山岸由佳

（『俳句』6月号・ムスカリの坂より）

ムスカリはあの青紫色の花である。丈があまりなくて、チューリップの名わき役などにもなるのだが、最近は単独でも園芸されている。日本では「寛大な愛」のようなポジティヴなイメージであるが、海外ではネガティヴな捉え方もあるようだ。座五の「下り坂」は、作者が坂を下っていることを示している。自ずと視線が下方へ向くのである。

どの石のあたりか河鹿鳴きはじむ　荻原都美子

（『俳句四季』6月号・着尺より）

河鹿の美声をとらえて、無意識に視線もそちらの方へ向いてしまった、と言うのである。多分、探し当てることにはならないのであるが。「あの辺りだな」と見当をつけただけで満足するものなのである。人の心の動性が巧みに表現されている。他に「無防備な背なかへ草矢飛ばしけり」がある。

冬眠の寝返るときに星生まれる　月野ぽぽな

（『俳句四季』6月号・結社アルバムより）

理屈を完全否定したような作法である。作者の詩境には合理主義と言う言葉は存在しないのである。読者が自分自身に引き寄せてそれぞれ解釈を許されている句なのである。

草の実やひとの故郷に来ています　芹沢愛子
（『俳句四季』6月号・わたしの歳時記より）

「ひと」と作者の関係性の親近、遠隔の解釈に拠って「故郷」の位置づけが大いに変わってくるであろう。筆者は極近しい「ひと」を想定して読んだ。かつてこの「ひと」もこの「草の実」を見て育ったのであろうと、心和ませている様子を想像した。

習さんもボクも犬掻き天の川　坪内稔典
（『俳壇』6月号・お隣りの習さんより）

「お隣り」は隣家なのか、将また隣国なのか、どちらとも読める。とにかく遊び心満載の十句が並んでいる。お得な十句である。

老木に咲きし徒花鳩遊ぶ　大村節代
（『俳壇』6月号・ぶらぶらとより）

この「徒花」には不実の意味合いよりも徒然の意味合いが色濃く反映されているように思う。座五の「鳩遊ぶ」から、余裕さえ感じられるのである。他に「花の道先師の句碑に会ひに行く」「花びらと雲とささ波ゆるる沼」がある。

全身に傷を負ひたる心太　山﨑十生
（『俳句界』6月号・新作巻頭より）

一句仕立ての句である。切れは無い。そこで「心太」をどのように読んだらよいのか？　ということになるだろう。筆者は作者の「心」と解釈した。ちなみに、他に「縛られてみたしと震ふ冷奴」という句も掲出されているのだが、こちらは「冷奴」を「奴」と解釈してみた。作者に怒られるかも知れないが。

親鸞像見ゆる軒端に柿吊す　篠沢亜月
（『俳句界』6月号・しろはえより）

「しろはえ」は仙台の結社とうかがっているので、「親鸞像」は稱念寺のことではないかと想像してみた。そうすると、この吊し柿が何とも美しい景に思われて、造景が昇華され、法の延長線上にあるように思われてくるのである。

おもはくの橋に日傘の立話　佐々木潤子
（『俳句界』6月号・しろはえより）

この「おもはくの橋」は、多賀城市にある野田の玉川に架かる橋であろうと思われる。安倍貞任縁の橋である。言い伝えなどを勘案すると「日傘」の方々は「踏まま憂き」話をされている様にも思われる。

暗緑や耳聡き夜の山清水　藤田敦子
（『俳句界』6月号・草の罠）

昏く沈んだ緑色の世界に「山清水」の音が聞こえてくるのである。神経が高ぶって寝付けないのであろうか、今夜に限ってやけにはっきりと聞こえてくる作者の心理を、「耳聡き」と表現している。

自選二十句

菅原真理

裏路地の木蓮粋な色使ひ

不死鳥のごと桜枝垂るる玉蔵院

辛夷散る花びらの紅残りをり

春浅し空は浅葱になりぬれど

雨粒を染むるほどなり花ミモザ

格子戸の並ぶ川筋糸柳

古希過ぎても群るれば少女夏椿

明滅はまさに螢の息づかひ

水盤の余白が語る華の道

新涼の珈琲は濃し長電話

真青なる海を泳ぎし鰯焼く

少年の頑な恋青蜜柑

控へ目な熊手かかへて新婚者

秋夕日繋ぐ手ここにある幸せ

たつた一駅武蔵野線の秋の旅

冬服の隠しに潜む電話メモ

嬉しきこと数へて眠る十二月

冬桜抜けゆく風の投げキッス

冬木立その生き様の美しきかな

セーターは夫の好みの海の色

新珠賞受賞者ノオト ――――〈菅原真理〉

言葉を編む

丸山マスミ

真理さんが櫻蔭句会に入会されたのは、二〇一七年二月。故山中順子先生がお元気でご指導をして下さっていた。田村みどりさん、大浜洋子さん、村浦とくさんなど重鎮もまだ投句されていた。その中で初めての出席でいきなり特選。

春浅し帰りの道は襟立てて

それが右の句である。お仕事帰りであろうか、「春は名のみの」風の寒さに思わず「襟を立てて」家路を急ぐ様子が素直に詠まれている。

その後水明入会、二〇二〇年には青葉の会に入られ、主宰のご指導も受けるようになり、俳句作りが楽しくなり、着々と力を付けられた。

新珠賞受賞対象句より

白靴で季節先取り六本木

真理さんは、新潟県新発田市のご出身。新発田市は、越後平野の北部に位置し、江戸時代には十万石の城下町として栄え、現在も歴史的遺産を町の随所にとどめているという。しかし、高校生の真理さんは、背後に聳える飯豊連峰を通学の電車の窓から眺めながら、「絶対この山の向うの太平洋側に出て行く」と心していたとのこと。

六本木に季節を齎すのはファッション。「季節先取りの白靴」に、「白いハイヒールで東京の街を颯爽と闊歩したい。」という少女時代の夢も秘められているのではないだろうか。

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

上京の夢を実現した真理さん。ゆったりとした思いで振り返ったのは、故郷の事か、上京後過ごした湘南の海辺での生活のことか。「ゆるりと時を巻き戻す」の措辞が良い。

誰にでも真直ぐに届く初日の出

友人に誘われて始めた登山。そして初日の出を拝んだ瑞々しい感動が「誰にでも真直ぐに届く」から伝わる。

組体操の子らの眼差し秋澄め
金管の音伸びやかや春来たる

この二句は、小学校の教師をしておられた時のお句か。子供たちの生き生きとした様子や、作者の子供たちへの大らかな愛情が感じられる。

そして良かったのは、作者の日常生活の中から切り取った感動の作品群を「鮮やかな時」という題名に集約した技。

自選二十句より

古希過ぎても群るれば少女夏椿

真理さんは、明るくて優しく瑞々しい感性の持ち主である。そして自然の雄大さ奥深さや人の温かさに感動し、それを句に詠みたいと、日々心掛けておいでだ。

桜蔭句会が終わると、私たちはパルコの地下のカフェで昼

食をとることが多い。七十代から九十代の媼が、少女に帰ったようにお喋りを楽しむ。その中でも、キラキラしているのが真理さんである。大きな眼で真直ぐに見て質問されるとたじたじとなることもある。

たつた一駅武蔵野線の秋の旅

真理さんは時々言葉探しの旅に出られるようだ。この一駅は、彼女のお住まいから察して、西浦和駅から北朝霞駅までかと勝手に想像する。この間には荒川がゆったりと流れている。車窓からは、サクラ草の自生地、荒川の調整池の彩湖が見え雄大な景色が展開する。角度によっては、遠く日光の山々や、スカイツリーなども見えるかもしれない。季節は秋、河原の樹々の紅葉や、草紅葉が楽しめる。

辛夷散る花びらの紅残りをり
春浅し空は浅葱になりぬれど
真青なる海を泳ぎし鰯焼く
雨粒を染むるほどなり花ミモザ

真理さんは句に色を詠むことが多い。散った花片にかすかに残る紅、空に兆す浅葱色、微かな色の変化を見逃さない。湘南の海辺で過ごした経験のある彼女には、日々表情を変える海の青さは特に慕わしいものだったのであろう。

四句目、何色とは言っていないが、雨粒さえ染めてしまいそうな鮮やかなミモザの「黄」が目に飛び込んでくる。

明滅はまさに螢の息づかひ
水盤の余白が語る華の道

「螢の息づかひ」言葉の選び方秀逸。

「もの思へば沢の蛍も我が身よりあくがれいづる魂かとぞみる」和泉式部の恋歌が口を衝く。

「水盤の余白」に心を使う花の生け方。目の付け所が非凡。

少年の頑な恋青蜜柑
控へ目な熊手かかへて新婚者
秋夕日繋ぐ手ここにある幸せ
嬉しきこと数へて眠る十二月

真理さんは藤沢市に住んで六年間、結婚後埼玉に移られた。しかし、お二人のお子さんを成した後、ご夫君に先立たれ再度教員に復職しお子さんを育てて来られた。

一句目、お子さんか、教え子か。少年の恋を青蜜柑とした季語の斡旋が良い。二句目、幸せを控えめに表す新婚さんの様子がほのぼのと伝わる。嬉しい時の真理さんのお顔はとても素敵。どんな嬉しい事があったのだろう。これらのお句からご家族手を取り合っての温かい生活。その中での気付きや幸せを私は読みとる。

天道虫吾の掌は滑走路

櫻蔭句会の過去のノートを開いていたら、右の真理さんのお句に対する亡き順子先生の「おもしろい思いつきですね。うまく飛びたてたかな。」という講評を見つけた。手加減なくずばずばとご指導して下さった順子先生の特選である。

セーターは夫の好みの海の色

最後に亡きご夫君への万感の思いを込めた一句。辛かったこと悲しかったことなど様々な想い。そして今は俳句を作る「言葉探し」の旅を楽しんでおられる報告でもあろう。日々感性を磨き力をつけておられる真理さん。

これからも、句作のための言葉探しや言葉を編むための苦しみや楽しみを御一緒にしていきましょう。

自選二十句

佐々木史女

渡良瀬や葦が煙と化す野焼

古利根の今朝の寂しさ鴨帰る

春風を背に菩提寺の大師像

みちのくの旅の写真に春惜しむ

姥捨の昔を想ふ梅雨山路

夜は鳴らぬ風鈴なれどいとほしむ

賑はひや今宵佐原の涼み舟

夏椿咲くや亡夫の忌の近し

絵日傘やマリリンモンロー真似し頃

向日葵や眩しすぎたるひと日暮れ

ひろびろと本家の墓域菊かをる

「ひばり」の歌に芒も泣くよ塩屋崎

身に入むや友の絵のある喫茶店

水割りに旅のみやげの酢橘かな

長安の仲麻呂も観し冬の月

この町が終の住処や落葉踏む

夕暮の淋しさ癒やす冬銀河

冬枯の鉢形城址武者の影

然りげなく老も紅ひく松の内

改札に繭玉ゆるる朝の駅

新珠賞受賞者ノオト ――――〈佐々木史女〉

春風

浜名　勇

佐々木史女さん新珠賞受賞おめでとうございます。

時を同じくして九十歳の卒寿のお祝をなされました。私達にとってもうれしいことです、と言うのも町の公民館で月一回第一日曜日に三時間程ですが、俳句に関心のある人達十名で俳句同好会をつくり俳句を勉強していますが先生はいません。自然と仲間の総意で最年長でもあり唯一正しい俳句の作法を習得されている佐々木さんに、俳句全般についてのご指導をお願いし楽しく勉強をしています。時々仲間から俳句の経歴を聞かれることがありますが、佐々木さんは昭和の女性の良い意味で控え目で詳しく話すこともなく、教えを請えば納得する添削などで仲間の尊敬を集めています。私もこの文章を書くため佐々木さんの履歴をお聞きしました。

佐々木さんは昭和八年埼玉県杉戸町在の農家に生まれ、町役場にお勤めの公務員の方と結婚し、子育て、家事と懸命に働き、今はやさしい家族に支えられ何不自由なく幸せに暮らしておられます。

それまでに幾多の苦難がありました。昭和十六年太平洋戦争が勃発、昭和二十年八月十五日の終戦まで小学生だった佐々木さんは空襲警報のたびに防空壕に逃げ込み勉強も満足にできず、今卒寿の俳句が詠めることが一番うれしいことだと話されました。

佐々木さんは時間にも余裕ができ、若い頃より学ぶことが念願だった。高齢者の学習の場として設立された「彩の国いきがい大学」へ平成十四年入学し、そこで俳句という短い文学の魅力に出合い勉強することになりました。そして平成二十年ＮＨＫの俳句講座を受講しました。

平成二十四年水明に入会し、令和四年に同人になりました。

自選二十句の中より

古利根の今朝の寂しさ鴨帰る

近くの古利根川の土手が朝夕の散歩道、秋に数羽で北から渡ってきた鴨も雛を育て、いくつもの群となり川面がにぎやかで見あきない散歩の楽しみだった。今朝は川面が静かで鴨の群れもない。北へ帰る季節になったのか、寂しさがこみあげる。来年会えるかな。

春風を背に菩提寺の大師像

最近は何かにつけてお寺に足が向く。墓所の草取り墓石を清め、本堂の大師様に手を合わせると春風に身を包まれ心も身も安堵する。

姥捨の昔を想ふ梅雨山路

紫陽花を見に近くの小山に出かけると、林の中に介護施設の建物が見えた。昔の姥捨山の伝説が想い浮かび、自分もいつかはと梅雨の山路をせつない思いで下った。

この町が終の住処や落葉踏む

この町に生まれ、この土地を出ることもなく九十年、思い出には切りがない。同級生も友人も年毎に少なくなり出歩くこともなく屋敷林の落葉を踏みながら掻き集め焚き火をすれば、近所の老人二、三人集まり話し相手になる。

然りげなく老も紅ひく松の内

元日から七日までは、年賀の挨拶に人がくる、息子の代なので控え目にと奥にいると、長寿の顔が見たいとの声が掛かり挨拶を受けることになる。長いこと忘れていた化粧をし、着物に帯を締めれば背筋も真っ直ぐ凛とする。

俳誌望見

染谷風子

「谺」

二〇二四年五月号　通巻三七三号
主宰　山本一歩　発行所　東京都町田市

平成五年五月、山本一歩が横浜市にて創刊。師系は小林康治。「自然と人間の係わりを、切れと調べを重視して詠う。」をモットーとする。月刊。

巻頭の主宰詠「混沌」十二句より四句。

せせらぎの音の聞こえて五月闇
昼寝覚め寝てゐた覚えなどなくも
掬はれて金魚の孤独始まりぬ
夏草に埋もるるごとく道のあり

一句目、雨雲の垂れ込む山中の暗がりに幽かに聞こえる水音。夜の闇と違う湿った暗さだ。二句目、午睡から覚めても夢現の夏の昼下りの倦怠。三句目、夜店の金魚掬いで手に入れた金魚一尾を金魚玉に移す。作者はその一尾に同情と自責の念を感じる。四句目、夏草に埋もるる道は人生の象徴か。

副主宰有馬五浪「薄暑」十句より二句。

晴れてきし窓いつぱいの青葉かな
揺れてゐるものなにもなし甚平着て

一句目、隣ページの作者の随筆によると自宅で車椅子生活との事。外出のままならぬ作者にとって窓外の新緑は格別であろう。二句目、人生を達観し物に動ぜぬ作者の姿が見える。

「秀嶺集」、「山嶺集」（ともに同人自選）より五句。

春愁や仁丹舐めてみたものの　大関　洋
沈丁の香りとどめる外厠　浮田　雁人
戸締りを終へれば一人灯おぼろ　髙島かづえ
龍天に登りて酒を飲んでをり　藤原　繁
春宵のワイン片手に聴くギター　小林比奈子

一句目、「春愁」は物憂い哀愁、心の気怠さ。迚もじゃないが仁丹では治らない。二句目、俳味の効いた句。四句目、気宇壮大な空想句。五句目、官能的な春の宵にワイングラスを傾けながらギターを聴く。ギターを弾くのはご主人か。

主宰選「山間集」より共鳴句五句。

一茶来て良寛の来て野に遊ぶ　家田あつ子
立ち漕ぎのぶらんこ山を足下に　大関　司
日輪を借りて七彩しやぼん玉　根岸　文夫
麦踏むや園児らの歌声にのり　表　成枝
着ぶくれてなほ傍らに羽織るもの　野中みのり

一句目、作者は今年度の「谺賞」受賞者。一茶も良寛も子供に親しまれている。心を和ませる一句である。三句目、太陽を受けて七色に光る石鹸玉が美しい。四句目、麦踏は孤独な作業だが園児の歌声に乗せられて麦踏む足も軽快である。

全体を通して、切字を使い、句形の確りした句が多いと感じた。「谺俳句会」の今後益益の発展を祈念致します。

句集喝采

曲淵徹雄

◆吉田幸敏「花野の中」　角川書店

著者略歴　昭和十四年横浜市生。平成十八年「朝」入会。飛燕賞。朝賞。平成二十九年「栞」創刊同人。縹賞。俳人協会会員。

著者の第一句集。職を退き、未経験の分野にチャレンジしようと農業と俳句を始めたと記す。農業をはじめ広い題材が詠まれている。およそ十六年間の三五七句を収載。句集名は「蹋まれば花野の中の昔かな」より。

初蝶の今年の白を農日記
阿夫利嶺の雲なき空へ早苗投ぐ
手挙ぐるは男の会釈田水沸く
田仕事の二人に余る秋日かな
晩景や冬耕一人をればよし

以上五句、農に勤しむ暮らしを生き生きと詠う。

太箸や背大事に男老ゆ
寒卵師系の端につつましく
干蒲団逃げも隠れもせず暮らし
逃水を追ひもうすこし行くつもり
後手に分別ありぬ年の市

以上五句、著者の人間味を感じさせる句。

他に「青芝に靴脱ぐほどは若からず」「鯛焼の表の顔と裏の顔」「星いれて川流れけり広島忌」など。

水涸れて今生いよよ面白し

ますます暮らしと俳句を楽しんでゆかれることでしょう。

◆田中信行「プリムローズの丘」　日経BPコンサルティング

著者略歴　昭和三十年京都市生。平成二十一年「槐」入会。平成二十三年「槐」同人。現代俳句協会会員。

著者の第一句集。俳句を始めてから俳句が日記代わりになったと「あとがき」に記す。テレビ会社の社長、会長を歴任された著者の豊富な句材が詠まれている。一五年間の三四五句を収載。句集を構成する三章それぞれに、句作の背景が伺える達文のエッセイを添えてある。

この先はプリムローズの丘にあり
万国のカレーを語る秋暑し
さらば欧州ユニオンジャックに寒鴉
瓦礫には青黄の小旗キーウ春

以上英国など外国滞在経験のある著者の感慨の四句。

「あほやな」と言はれて夕焼美しき
初秋刀魚小言を添へて出されけり
駆け巡る人事異動の春一番
一打席一三振の夏終はる
オリオンに世俗まみれの顔曝す
祖父を知る女将の酌やちちろ鳴く

以上六句、日記代わりの句には様々な思いと、同人会長を務められるという人柄が滲んでいる。

新緑の百町森の会議かな

掲句は、「くまのプーさん」を読んだ著者の子供時代の心象風景であるとエッセイに述べる。これからもおおらかに句を作り、第二句集へと向かわれることと思う。

山本鬼之介　選

水明集

水芭蕉谷間の白き風となる
炭団坂登る下駄音夏近し
受胎して輝くひとや青葉潮
標識の読めぬ奥山万緑や
放送部の声をのせゆく若葉風

さいたま　菅原真理

桐の花火の見櫓のある役場
武具飾り軸は武蔵の墨絵かな
嫁にゆく娘十八桐の花
てつぺんを競ふが如き桐の花
仏間には美男六体武者人形

新　暦文

老舗ホテル若葉の中の車寄せ
車夫ゆつくりと若葉の道を角館
新緑やチャペルの鐘が澄み渡る
白南風やしぶきにさわぐ舟下り
糠添へて筍二本届きをり

さいたま　岡田宣子

春日傘開く登りの馬籠宿
口伝ての開拓悲話や麦の秋
緋桜や墨の香つよき朱印帳
総員のならぶ甲板波薄暑
短夜の名告る「白浪」五人衆

伊奈　菅原卓郎

二輪草流れの青き梓川
次次と雲の湧き出づ二輪草
雨筋のつつましきかな梔子の花
出帆のテープの千千に夏来る
両国に佳き男ら来五月場所

さいたま　小林京子

出格子の質屋の通り春日傘
春日傘たたむ手つきの夢二ふう
「寅さんの産湯」の水や夏近し
「一葉の井戸」に迷へる蝶の影
愛犬に別れを告げり夏はじめ

越谷　阿部幸代

港町走り抜けたる余花の風
伊曽保を読み聞かせゐる首夏の宵
翠巒や五言絶句をそのままに
歳を重ね緋牡丹なほも鮮やかに
新緑や石坂なれど苦にならず

平塚　丸屋詠子

武具飾る客はそよ風ペルシャ猫
磯宿の魚拓のにじみ卯月波
鎮魂をのせて卯浪の遠ざかる
論客の古語文法や袋角
裏口の桐の苗木に花見つく

さいたま　池田珪子

フランスパン小脇に初夏のジャズの街
靴脱いで鈍行列車麦の秋
母の日のさかしら波を白き鳥
校庭を足環の小鳩バードデー
田を植ゑてどんと花柄魔法瓶

森下山菜

タンカーの船長室の武者人形
陳列の金塊の燦ジキタリス
かぐはしき柔肌の艶柏餅
万緑や光合成の匂ひ立ち
自動車の空を飛ぶ日やバードデー

皆川更穂

今日を生きる胸の温みや愛鳥日
桐の花終着駅をかがやかす
音信のなき人想ふ桐の花
子が巣立ち武者人形は箱の中
子の夢に武者人形が歩き出す

さいたま　篠﨑紀子

久に見る和服美人の春日傘
絞り地の母の形見の春日傘
若者の路上ライブや街薄暑
蕎麦屋から出しの香りの薄暑かな
告白やソーダ水の泡が消え

清水桂子

ゆるぎなき靴音はづむ春日傘
花菜畑月の光に融け合へり
はや薄暑草の勢に追ひつけず
薄暑光木蔭やさしく吾誘ふ
草陰にじつと雨待つ雨蛙

山岸久美子

松籟や夏落葉踏み海岸へ
翠巒を映す湖面や遊覧船
桃源の薔薇のトンネル出れば婆婆
獲物追ひ田水を揺らす青大将
宴さなか融けて細れる花氷

反町　修

武者人形を高きに飾る本陣宿
紙兜冠る園児と武者人形
縦列の菖蒲を渡る風はむらさき
御座敷に野草しつらへ鮎の宿
バードデー人語鳥語のゴルフ場

寺男皆まで掃かぬ花の塵
マドンナは高窓に居り恋の猫
其処此処に春筍土の底力
鯉幟川面一面泳ぐかな
郷里の名四股名に負ふや五月場所

百までは生きる覚悟や生身魂
短夜や八十路独居の暮し振り
ビール酌む集ひに上座下座なく
新茶汲む終の住まひに暮す日日
山越えの風を風鈴選びをり

日曜のチャペルの鐘や風薫る
生垣を茶摘みしてゐる老夫婦
若葉染む膝を崩していただく茶
逃げ水を逃がすまじとや車椅子
あざやかな躑躅の山路知己と遭ふ

さいたま　霜多光代

本橋稀香

香田裕誌

加藤でん治

町中に若葉沸き立ち大合唱
若葉風くつきり葉影揺れてをり
磯巾着満艦飾の目立ちたがり
ゆらゆらと待つのは楽し磯巾着
初物や丁寧に炊く豆ごはん

ダービーや勝ち馬騎手の鼻高し
ダービーやゴール争ふ砂けむり
夏落葉命はかなき白虎隊
人知れず朽ちていくかな夏落葉
建具師の鉋屑飛ぶ五月晴

墨堤に匂ふが如き春日傘
病窓に立て掛けてある春日傘
音遠く消ゆる機影の薄暑かな
仁王尊の睨み鋭く薄暑光
決算の申告終へて夏迎ふ

菊根分細かく分けて白と黄に
紫の食用菊も根分して
裏庭のブロック塀に子猫かな
春の日の縁側猫の指定席
麗しき手でぽい捨てさるる子猫かな

さいたま　寺町知子

千坂平通

飯田忠男

杉戸　佐々木史女

冷房へ花屋の花を通り見て
いつまでも座つてをりぬ冷房裡
冷房と吾の体温とクラシック
冷房や携帯電話にアラームを
冷房にそろそろ飽きて本を買ふ

山笑ふ信濃路の朝晴れにけり
単線の二輛連結山笑ふ
花曇り絵の具にほふや無言館
幼子や花種ばらり宙に蒔く
古稀近し桜しべ降る遊歩道

麦の秋鬼の抜けたるかくれんぼ
片方のピアスは何処に二輪草
水中花心開けどままならず
梅雨の夜の家路を急ぐハイヒール
犬吠の遠き帆船夕焼けて

空に舞ふ白鷺一羽貨車ヤード
狭き庭なほ狭むるは新樹かな
そよ風や余花揺れ動く里山に
花曇籠もる書斎の心地良さ
入相に三味の音響く余花の里

さいたま　吉川拓真

阿部貞代

綿引まりこ

利根　倉田星歩

陽炎や一輛電車ゆがみ来る
羅や心ひかるる真砂女の句
羅や白い襟足美しき
緑蔭やせせらぎ聞ける遊歩道
ゴルフボール五番ホールの緑蔭へ

川筋の葉柳揺らす見えぬ風
梅雨深し視界さえぎる運転台
闇の夜や螢呼ぶ声遠ざかる
道の駅揃へて並ぶ山の蕗
篤農の若き力や麦の秋

春暁や湖面に映ゆる月の道
ソーラーの遊覧船や春の湖
夏めきて京の神前挙式かな
松の花巫女の汲み入る神酒かな
夏衣や巫女の千早に京の風

夏めくや「美白」商品店頭に
日焼けとしわ老農婦には勲章か
渋滞の横をすいすい田植せり
五月田や田靴日毎に重くなり
緑蔭や田仕事終ふる母を待つ

若狭　山﨑郁子

岡本祥子

畠中八重子

松村笑風

卯の花を束ねて墓参桜島
卯の花や月夜に淡く里の道
生き方を解く読みかけの本青嵐
放たれし朱鷺を青田の空が待つ
江の島の海の彼方や青葉潮

さいたま　竹澤和子

リラ冷えや汽笛呼びあふ小樽港
リラ冷えに誘ひ込まるる美術館
若芝に脱ぎつ放しの赤い靴
烏賊火燃えかすかに聞こゆおけさ節
烏賊火燃え舟宿の窓開け放つ

森美枝子

初夏や無言の夫は反抗期
新緑や掃き清めたる無縁墓地
無情にも虫食ひ痕のキャベツ畑
煽られて手招きの如山法師
山法師の影はやさしく一休み

緒方みき子

笊の目に二つ三つの鹿尾菜(ひじき)かな
山も木も無上の中に風薫る
夏の果時は止まらず巡り来る
砂時計の砂の静けさ蝸牛
海の色砂に埋むる晩夏光

所沢　関根千恵

リラ冷えや坂に漂ふ焙煎香
球足の予測狂はせ芝青む
リラ冷えや靴音硬き石畳
元寇の記憶夜凪の烏賊釣火
大王の寝所は何処烏賊釣火

上尾　室井早都子

緑陰の隧道ゆけば夏来る
出目金の動き程には進まざる
車座の打ち明け話夏座敷
夏座敷寝息をたてる者もゐて
潮騒や会話途切れし夏座敷

さいたま　石関六弦

緑さす家族見守る古時計
下校時につつじの蜜吸ふ黄帽の子
若鮎のはぬる飛沫が遠くまで
風はらみ元気に泳げ鯉幟
雪柳夜満天の星のごと

東京　畑宮栄子

青嵐犬吠埼に地球見ゆ
印結ぶ露座仏の眼に月涼し
筍のけものめく皮巻き落ちて
浜離宮の新樹の先やビル高く
白髪のジーンズ似合ふ夏の女

さいたま　羽島秀子

カレンダーに緑のハート豆御飯
白傘を薄青に染め若葉雨
白鷺のゆく空映す田の鏡
薄絹に残る移り香余花の雨
みちのくの白き頂き若葉風

吉川　杉浦千祐

段取りのあるかに開き八重の薔薇
花は葉に五百のポーズ羅漢さま
木々ごとに緑違へて山開
玉砂利に影落とし合ふ新樹光
夜を飛ぶ渡御の賑はひこぼれ来る

さいたま　蛭田律子

春惜しむ明石市場で買ふ釘煮
卯の花の匂ひかんばし駅フェンス
青葉潮婿の釣果の刺身食む
文豪の町の立て札読む立夏
旅かばん明日は霧島つつじかな

森下美智枝

楽園の扉あるかに春の湖へ
薬宝湯ゆげしめやかに五月闇
万緑におしやべり雀掻き消さる
老木に年輪背負ひ蝸牛
雨上がり道標なる蝸牛

大阪　飯塚智恵子

葉桜やビルの谷間の朱の鳥居
ポニーテールの飛ばすバイクに風薫る
車椅子の母を押す子や風薫る
青蜥蜴草取る妻と鉢合せ
西陣に機織る音や古簾

さいたま　大熊健司

夫揺らす吊り橋渡り山法師
山法師本音を隠し一周忌
倒立の名無しの山や代田水
老いてなほ無い物ねだり夏の星
夏蒲団子らの枕は父の腕

所沢　飯室夏江

梅雨晴間今日の散歩は六千歩
その事は今はさておき新茶汲む
そう母は藍の浴衣の似合ふ人
すずらんや鼓膜の奥に鈴の音が
梅雨出水地球の水のこぼれさう

さいたま　小山あつ子

葉桜の隆々として男前
栃の花急ぎキャンドル灯しをり
同じ顔ふくるる腹の鯉泳ぐ
初夏の白き花々歌うたふ
上りつめ下りに迷ひ黒い蟻

東京　柳父はる

新緑や山もこもこと肩を張り
菖蒲湯を掛け合ふ幼な姉妹かな
万緑を背中に感じバーベキュー
朝寝して犬の尻尾に起こさるる
新茶汲み夫との会話ほつこりと

和歌山　嶋田洋子

どちらへと問ふてみたしや袋角
母寝ぬればたちまち寝息芒種かな
日をうけてサイダーを飲む母正座
蕗の皮するする剥いて背を思ひ
何もかも知つてゐるぞと袋角

川口　新井史子

熊之実と磯巾着にシャンソンを
春惜しむ旅番組は弘前城
春惜しむ寿退社の今昔
万緑やうちの小さき庭さへも
参道の躑躅こぼるる並木敷

さいたま　平野　楽

あつぱつぱ物干竿にひるがへる
ナウシカの仮装行き交ひ若葉風
お神輿は七つの町の回り持ち
河川敷に少年団と捕虫網
祭り足袋買ひに早退雨上がり

横浜　石井妙子

三爺のよもやま話柿若葉
数人で煮つめる蕗の香りかな
両どなりさわぎたてたる蛇ぎらひ
飛行機雲の二等分する五月空
カーネーション二割引きにて並びけり

鬼石　榊原聰子

麦の秋なにやら喋る飼鴉
二輪草峰へ導く丸木橋
筍を筵に飾る婆の声
筍のお色直しや夕餉食ふ
天の下意気揚揚と蟻の列

さいたま　秋谷風舎

青潮や朝日を拝む露天風呂
蚕豆の美味さ引き出す焼きかげん
夏潮の青に魅せられ足繁く
師と放課後に下校の子らや夏の街
新茶のみ借りたる本を読みふけり

小川洋子

新緑の中風駆くやさらさらと
艶やかにまぶしき柿の若葉かな
海風がほほなで渡る初夏の旅
新緑や幸運ぶ風すぐそこに
五月晴何か良きことありさうな

石浜悦子

青嵐鬼剣舞に清む山河
挑むごと八十路の舞ふや青嵐
足早に雲水の列青嵐
芍薬や己が花蜜に固まれり
子と犬と並び見てゐる目高かな

さいたま　岡田芳春

南風二人乗りして手を腰に
南風愛妻弁当忘れずに
海南風坂道いつ気に走り降る
大南風航空母艦入港す
大南風鯱のオルカの水しぶき

北山建治郎

紫陽花は押し合ひへし合ひ丸くなる
師が映り思はず正座朝薄暑
シニア割心の揺るる薄暑かな
基礎英語欠伸ばかりの初夏の朝
紫陽花や昨日と違ふ今朝の顔

小田三茅

新しきランドセルから春の風
もくもくとしげる若葉と雲を見る
江戸前の三社祭の心意気
電話から母の声聞き時鳥
木蔭にて水面に映る若葉かな

東京　桐山遊童

急流に棹さす水夫の汗の散る
アンカーの受け取る襷汗重し
帝国のごとく筍ずいずいと
色白の京たけのこやレシピ繰る
筍や目覚めぬやうにそつと掘り

さいたま　横山礼子

風薫るひと駅先へデニム穿き
春揚羽一寸の魂からたちへ
五月晴いつもの道を今日は右
シーソーに一人樟の花南風に散る
梅雨晴や巣穴修理か蟻二百

駒谷行雄

筍は土付きのまま新聞紙
筍を掘る名人の蹠よ
汗染みは大陸の地図配達員
筋トレの汗うつすらと日課かな
夏空のコントレールを見上げたり

樋口元美

風光るトンボロ歩き江の島へ
菖蒲湯や香り清かに厄落とす
菖蒲湯の葉の切つ先が我に向く
床の間に映ゆる一輪山法師
今更と思ひつ菖蒲の風呂に入る

藤沢　小島喜代子

店頭に新茶振る舞ふ道の駅
朝日背にサーファーの待つ大卯波
初夏の風甍を競ふ城下町
山女焼く煙一筋立つ川原
旬菜で傘寿を祝ふ初夏の膳

さいたま　鈴木藻好

ポイントへ急ぐ釣り船南風
気まぐれな南風が木の間に遊びをり
猫追ひて出れば程よき南風
手作りの隣家の巣箱客が来し
巣立鳥頭上注意の札のこる

北出久美子

風薫る旅に母娘と見られけり
畳紙は旧姓のまま風薫る
羽抜鳥誰しもいつか通る道
ショーウィンドーの映す姿や羽抜鳥
笑ひ声絶えぬ家族や夏来る

木谷葉子

万緑の山に登りし三世代
万緑や留学試験受くといふ
万緑や城くつきりと浮き立てり
万緑や念願かなひ友来る
春惜しむ追憶に浸る写真展

和歌山　南條きわゑ

歩き喰ふ生麩田楽京二条
鼾かく夜遊び猫の朝寝かな
山宿の夕餉鯉こく茎わさび
リラの雨牧のサイロの老いし白
朝寝からつづきのやうに母の逝く

さいたま　石黒由美子

空の色問ふ初夏の便りかな
風薫る窓辺に置いてみるブーケ
母にまだちらつく気概新樹光
新樹光余韻鮮やかなる公演
万緑に染まりたるまで居る独り

大阪　遠藤人美

葉桜や建て替へ駅のペンキの香
烏賊釣火沖を眺めて露天風呂
荒れた日の雨音を聴き朝寝かな
函館のもののふ偲ぶリラの雨
葉桜やじやこ天つまみ小昼とす

さいたま　宍戸洋子

初フリマ汗かき売るや色鍋島
山毛欅の木に触れ汗拭ふ下山道
長崎の暗き壕跡汗拭ふ
筍や竹林守る人の鋤
湯上りの童のうなじ筍や

前田夏野

母の杖にそつと手を添へ青嵐
朝曇り吹き立つ風の青さかな
ぴちぴちと目高につられ町游ぐ
忘れたきこと多かりし青嵐
水草を揺らしきらきら目高かな

さいたま　鈴木香音子

吾もいつか巴里に行きたし晶子の忌
晶子忌や子供の数に驚きぬ
五月富士目前にあり合掌す
野生馬の親子草食み風薫る
石段を楚楚と降り来る日傘かな

高原和子

波打つや蔵の四方は麦の秋
口噤み夕餉の支度二輪草
連休に一家総出の茶摘かな
木漏れ日に紅色宿す二輪草
長雨にしなだれてをり麦の秋

篠原さよ子

出来ばえを姉とあぢはふ草の餅
蓬餅さすが老舗と頬張りぬ
しやぼん玉透ける向かうに光る景
一口の試飲の新茶潤む喉
茶所のそれぞれの味新茶汲む

武田重子

餞別の煎餅かじり春惜しむ
磯巾着賑はふ浜に知らん顔
紫陽花の蕾発見午後十時
紫陽花や電動スクーターの行く
赤白青黄得点待ちの夕薄暑

さいたま　鈴木敦子

早朝の新茶の香る仏間かな
通学路みかんの花の匂ふ頃
雨の中右も左も茗荷竹
一本の仏間明るきアマリリス
わらび摘み片手で持ちて帰る朝

藤岡　加藤ナヲ子

紅型の花鳥飛び立つ夏衣
夏衣透けて見えざる胸の内
夏服は遠きかの日の匂ひして
夏服や渋谷駅前風渡る
改札を抜ける夏服雨上る

東京　山中いちい

寝転びてともにやすらふ緋の目高
こぼれ落つ光の渦に白めだか
青嵐待つ身楽しむエキストラ
青嵐草の匂ひの通る道
乳母車片手日傘の母強し

草加　持永喜夫

初めての売上げトップ風薫る
幼児の声あり過疎の村初夏
羽抜鳥デートはしばし休みとす
真似てみよ五月病の子羽抜鳥
心経を一緒に唱ふ薫風の中

さいたま　門真宏治

羽抜鳥亀の隣でまどろみて
薫風や夫のウクレレ軽やかに
亜細亜行く紅茶列車や風薫る
体育の声高らかに夏きざす
願はくば端に巣かけよ夏つばめ

三浦真由美

汗ぽたり畝に染み入り熟成す
山寺や芭蕉と曽良の汗の跡
立石寺句に見ぬ汗や芭蕉立つ
筍掘りを今も自慢の百寿なり
竹藪の地下の根を伐り夏の園

糸井しるく

夏衣茶会静寂抹茶喫す
夏衣踊る指先足さばき
学び舎の夏服替はる日を待てり
指揮棒を見つめ若葉を歌ふ子ら
滑り台若葉仰ぎて滑り下り

東京　深沢りこ

図書室に「相聞」探す晶子の忌
五月冨士大地のいぶき輝けり
野を焼くや半纏声を掛けあひて
裾あげて小川渡りし晶子の忌
五月冨士忍野八海賑はひぬ

さいたま　山下ユリ子

風薫るタンゴの夕べ三歩五歩
遠卯波大漁旗に陽が昇る
遠卯波船板流れ難破船
薫風や快復告ぐる文を師に
薫風や鼻唄の出る散歩道

落合和枝

水芭蕉吾子の車に尾瀬訪へば
一葉の碑は「らいてう」揮毫菊坂暮春
文人の軌跡のロマン本郷暮春
早苗田の里を水彩風景画

宮代　関谷多美子

開園を待つ行列や街薄暑
麦の秋日の出の前の一仕事
麦の秋こんがり焼けたパンが好き
五月晴一人孫守り家仕事

さいたま　川島夕峰

風薫る寺の床几の緋毛氈　さいたま　石井直子

青時雨浴びて顔出す野良猫

大鳥居抜け薫風のつづら折

角少し湾曲したる植田かな　藤沢　藤田寛二

菌騒ぎ恩師で夫妻春に逝く

「感謝」と言葉大切知る春ぞ

主宰が添削をしている句があります。

提出した句を思い出して勉強して下さい。

☆

☆

俳句

9月号予告

8月24日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑩

巻頭作品50句　西村和子

作品21句　寺井谷子・岸本尚毅

哀悼　鷹羽狩行

追悼文　宇多喜代子・大串章

論考：鷹羽狩行の功績

隠れた狩行の一句／狩行の名句

追悼作品10句／略年譜

追悼鼎談　片山由美子×宮坂静生×仁平勝

好評連載

虚子の遺産／近代俳人列伝

小林秀雄の眼と俳句／俳句の水脈・血脈

蛇笏賞の歴史

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

作品鑑賞

山本鬼之介

炭団坂登る下駄音夏近し　　菅原真理

東京都の23区の中で最も坂が多いのが文京区で、名の付いた坂だけでも115以上もあるとのこと。何故そんなに坂が多いのか、その理由は、大昔からこの地が谷間の多い地形であったからである。

炭団坂は、文京区本郷4丁目32番と35番の間を南南東へ上る長さ35m53段の直線状の急な舗装階段である。この坂の下には、樋口一葉に縁の深い菊坂があり、上りきった10番からは、春日通りに至る一直線の道が通っている。一葉をはじめ、正岡子規や宮沢賢治などの多くの文人が暮らしていたこの界隈は、都心でありながら今なお明治の頃の風情を残しており、時折鳥の鳴き声も聞こえてくる土地柄である。

晩春のとある日に本郷を散策している作者の姿なのであろう。日常の靴履きの足とは違う開放感を味わいながら、からころと下駄を響かせ炭団坂を登っている様子が、手に取るように伝わってくる。

現代の若者や子供は、見たことのない「炭団（たどん）」であるが、坂の名として炭団がその存在感を示している。

桐の花火の見櫓のある役場　　新暦文

その昔、署員が交代して監視していた消防署の望楼や火事の時に半鐘を鳴らした火の見櫓は、その役目を終えて久しいが、後者は、今なお町の中に止めているその姿を眼にすることがある。本句の役場に残っている火の見櫓もその一つであり、年輪を重ねた桐の木と共に、役場の存在感を示すのに一役かっている。役場の職員や訪れる住民に、桐の木とその傍にある火の見櫓が心の安らぎを与えている。

老舗ホテル若葉の中の車寄せ　　岡田宣子

東京に在る老舗ホテルで調べてみたら、その御三家として、帝国ホテル・ホテルオークラ・ホテルニューオータニの名が出てきた。予想した通りであったが、新御三家、新々御三家として此れ等とは別のホテルの名が挙がっており、昔の歌手や芸能界の世界と同様の扱いに思わず笑い出しそうになった。

掲句は、東京のホテル御三家の車寄せと受け取れなくはないが、「若葉の中の」という修飾語から、それなりの雰囲気を持つ土地にある何代も受け継がれたホテルのように感じられる。きっと作者が利用したことのあるホテルなのであろう。

その時の若葉の印象が、想い出を強固に繋ぎ止めている。

短夜の名告る「白浪」五人衆　菅原卓郎

文久二年（一八六二年）三月、江戸市村座で初演の歌舞伎の名演目「青砥稿花紅彩画」＝通称「白浪五人男」を題材にした俳句であるが、さてこの場面が如何なるものであるのか即座に判断しかねる。季語の短夜は明らかであるから、夏の日の一夜、歌舞伎かあるいは他の劇場で演じられている芝居の様子とみるのは容易であるが、それでは敢えて俳句にするまでもないことである。筆者は、下五の「五人衆」に注目し、俳句仲間の五人の男が、居酒屋の看板近くの時間まで、「白浪五人男」よろしく、それぞれ五人男の役柄を気取っておだをあげている様子かと判断した。さて、「水明五人男」は誰であろう。日本駄右衛門は、弁天小僧菊之助は…。

雨筋のつつましきかな梔子の花　小林京子

昭和60年ころであったろうか。東京四谷の英国大使館裏にあったバーで聴いたギターの弾き語り「くちなしの花」が、今でも耳に残っている。艶冶にして哀愁を帯びた歌詞に魅せられて、その後カラオケで挑戦したことも何度かあった。

静かに庭木を濡らしてゆく夏の雨。梔子の白色六弁花が、その雨を受けて花の魅力を一際引き立たせている。中七の表現が、降り注ぐ雨の雰囲気とともに、梔子の花の慎ましさをも表している。

出格子の質屋の通り春日傘　阿部幸代

表通りではなく、裏通りや路地に店のあるのが昔ながらの質屋で、客の気持を配慮した商売の在り方であったと思う。現代では、銀行ローンなどで手軽に金の融通が付くので、質屋の数が減ったが、掲句の様に今なお質屋が健在している街がある。しかも、出格子のある質屋となれば、明治・大正・昭和がそのまま残っているかのようで、嬉しくなってしまう。出格子の雰囲気にはそぐわないような春日傘との組合せが、現代の複雑な世相を物語っているように思えてくる。

翠巒や五言絶句をそのままに　丸屋詠子

「翠巒」は「夏の山」の傍題になっている季語であるが、緑一色に輝く夏山の様子を実に美しく表している言葉だと思う。作者は、学生時代に習った漢詩の中に、緑の連山を詠んだ詩があったことを思い出してこの季語に行き着いたのであろう。切れの佳い一句である。

鎮魂をのせて卯浪の遠ざかる　池田珪子

今年の正月に発生した能登半島大地震でも多くの命が奪わ

れた。寒冷の海へ流された人々の魂が、卯浪に乗って沖へ沖へと遠離ってゆくという句意かと思うが、沖の果てには、魂を待ち受ける西方浄土があるのだろう。白浪の立つ沖合を凝視している作者の真摯な目差を感じる。

靴脱いで鈍行列車麦の秋　森下山菜

急ぐ旅ではないし、鈍行列車を乗り継いで目的地へ行こうと思い立った。従来線の特急列車や新幹線では到底味わうことの出来ない学生時代に還ったような開放感の溢れた旅心である。一駅ごとの車窓から眺める景色や駅々の風情や人の動きなどをこの句から読み取ることが出来る。「靴脱いで」に作者の心の開放感が、「麦の秋」に作者を包み込む季節感が確りと詠み込まれているし、「鈍行列車」が作者の良き相棒なのである。

自動車の空を飛ぶ日やバードデー　皆川更穂

なかなか夢のある俳句である。子供の頃に読んだ漫画本にこんな場面が載っていて、夢を膨らませた記憶があるが、本当にこのような日がやってきたら、地上の景色も空の景色も一変してしまうだろう。まさかとは思うが、大型のドローンが実働していることを考えれば、空飛ぶ自動車が実現する日も近いのかも知れない。

桐の花終着駅をかがやかす　篠﨑紀子

広辞苑には、終着駅という熟語が掲載されているが、始発駅という掲載は無い。明鏡国語辞典と新明解国語辞典には、終着・始発という言葉はあるが、終着駅と始発駅は共に無い。さて、終着駅に着いた列車はどうなるのだろう。筆者は、始発駅という熟語があってしかるべきだと思うが。とにかく、終着駅という言葉には特別の重みがあるような気がする。終着の時間が日中であれ、また、かなり夜も更けた時間であれ、その駅に降り立った人には、それぞれそれからのドラマが待ち受けているように思えてくる。地味でありながら格調のある桐の花ならではの包容力が感じられる。

告白やソーダ水の泡が消え　清水桂子

この句からかなりの時間の経過が感じ取れる。何かの悩み事を告白している人とそれを聴いている二人の人物がいる。話す方も、それを聴く方もかなり疲れてきている。元気よく泡が立っているからこそのソーダ水なのに、泡が消えたのでは単なる生ぬるい水である。先の進展が望めそうにない沈鬱な雰囲気が漂っている。

ゆるぎなき靴音はづむ春日傘　山岸久美子

春日傘を格好良く差し、姿勢を正してリズミカルに街をゆ

く溌溂とした女性を思い描く俳句である。高齢男子には、受け入れがたい風姿の人が多くなった昨今であるが、偶にこのような人に出会うと気分爽快になる。

桃源の薔薇のトンネル出れば娑婆　　反町　修

多分著名な植物園か薔薇園であろう。通路の両側から伸びた薔薇の枝が通路の上で重なり合って薔薇のトンネルを為している。薔薇の香りも重なって、まさに桃源郷の気分を味わっても無理はない。しかし、その雰囲気に少々疲れてきたころ、明るい日差しと外気に触れることが出来た。「娑婆」は、その時の作者の正直な気持の顕れであろう。

御座敷に野草しつらへ鮎の宿　　霜多光代

「鮎の宿」というからには、その近くの川で獲れる活きのよい鮎を客に供する料理旅館なのであろう。そして、更なる心延えが、客室に活けられた野草の花活けである。豪華な活花よりも素朴な野草の方が料理の趣向にぴったりであるから、客の悦びが二倍にも三倍にもなる。リピーターを大事にする宿の配慮が窺われる。

寺男皆まで掃かぬ花の塵　　本橋稀香

その寺に雇われて雑事に従事している人である。口数が少なく、取っ付き難いが、心が通じると結構頼りになりそうだ。境内の桜が散って、毎日掃き清めるのが大変である。完全に掃き取るのではなく、花片を少し残しておくのが自然の美につながるのかも知れない。寺男の絶妙な技なのだろうか。

山越えの風を風鈴選びをり　　香田裕誌

冬季に風花を運んでくる風のように、幾つもの山を越えてやってきた旅姿の風なのか、実にロマンに満ちた風である。その風を受けて鳴る風鈴の音は、何時もと違って溌剌とした音のように聞こえる。廊下の籐椅子でその音を聴いている作者の胸に、詩心が膨らんでゆく。

生垣を茶摘みしてゐる老夫婦　　加藤でん治

茶の木が生垣になっているまことに結構な住まいである。茶所へ行けばこのような場所もあるのかと、感じ入った次第である。夫婦でのんびりと茶摘みをして新茶に仕上げ、今年の茶の味を語り合いながら喫している姿が伝わってくる。

町中に若葉沸き立つ大合唱　　寺内知子

立夏を迎え、木々の緑が五月の空へ諸手を挙げてアピールする季節がやってきた。作者の住んでいる町の若葉が、人々の目を癒している。若葉が萌える木立を歩いていると、風を受けた木々の葉がさわさわと心地よい音を立てており、それを、若葉の大合唱と捉えた作者の感覚が好ましい。

水琴窟

（六月号鑑賞）

池田雅夫

目鼻なき紙の雛の笑まひかな　寺内洋子

代々伝わる古き雛や七段飾りなど、各家庭によって飾られるお雛様もさまざま。ていねいに紙で折られた雛ではあるが目鼻がない。しかし、しかし、その表情は明るく、見る人の心を和ませる。「紙の雛」の折り手と児等の姿がうかぶ。

制服の採寸帰り春麗　松村笑風

入学が決まり、「制服の採寸」を終えて帰る道々、うららかな春の日である。希望に胸をふくらませ、これからの学校生活をあれこれと想像しているのだろう。意識的に「春」の字を加えた「春麗」に複雑な心持ちが集約されている。

三月や袴の乙女駅に咲く　杉浦千祐

「三月」は卒業の月。大学の卒業式では女学生が袴姿で臨むことが慣例となっている。多数の「袴の乙女」が「駅に咲く」と詠んで華やかさを強調しているところに工夫がある。

花筵一升瓶をどんと置く　湯浅　和

花見の様子を豪快に詠んでいる。桜の花の下に「筵」を広げ、持ち寄った料理を食べながら花を愛でるのである。昨今はブルーシートが多くなっている。「一升瓶をどんと置く」で、親しき仲であることがわかる。ぜひ加わりたいものだ。

慕はしき声まで似たる春ショール　遠藤人美

「慕はしき」の奥床しい言葉に魅了された。母の形見であろうか。「春ショール」をまとい出かけていると、母を知る人に、「まるで生き写しのようだ」と言われたのだ。登場人物が一人もいないのに、そのように想像するほかはない。

春の雪能登の海猫啼き止まず　播磨　進

今年の元日には能登地方を震源とする大きな地震があった。被害は甚大で、今なお避難生活を強いられている人たちも多い。陽気が柔らいできた三月、「春の雪」が降ってきた。傷心の心情を「海猫啼き止まず」に託して詠んでいる。

潮騒の心地良きかな春の海　岡田芳春

蕪村が〈春の海終日のたり〳〵かな〉と詠んだように、ゆったりと長閑な海であろう。一定のリズムを奏でるような「潮騒」を聞きながら潮風に吹かれ至福の時を過ごしている。

七色に映ゆる富士の嶺石鹸玉　鈴木藻好

「七色に映ゆる富士の嶺」で一瞬、虹を想像したものの、「石鹸玉」と意表を突かれた。石鹸玉は光の反射で錦のようにきらびやかである。大きな石鹸玉に富士の嶺が透けて見えたのであろう。富士をすっぽり収めた石鹸玉が強調される。

春時雨忘れおかるる女傘　小山あつ子

「女傘」がいい。それが「春時雨」に重なり艶やかに人を惹きつける。「忘れおかるる」状況から、年配の女性かなと思うが、否否、年配でなくても、うっかり忘れるのが傘なのである。人の心理を深くついた技巧に感服した。

うららかや風のむくまま気球船　樋口元美

「気球船」？「飛行船」ではないのかと辞書を引く。「気球」は、空気より軽い水素、ヘリウムを詰めて浮かべた袋状のものだ。「飛行船」は、その袋が船形のもので、どちらも同じと解釈する。気球船を見ていると「うららか」になる。

太陽に向つて笑ふ蕗のたう　加藤ナヲ子

「蕗のたう」を見て直感の句であろう。やわらかい日差しに蕗のたうが花を咲かせている。まるで「太陽に向って笑ふ」かに見えたのだ。擬人化の効果を充分に活かしている。

うららかや太き柱の手斧跡　石井直子

「うららか」と感じることは人それぞれ。古民家の「太き柱」には、「手斧」で削った痕がありありと残っている。昔はまだ鉋がなく、手斧で梁や柱を平らにしていたのだ。そんな時代に思いを馳せて、明るく和やかな一日を過ごしている。

春の雨まだ明けやらぬ旅の宿　三浦真由美

「春の雨」と「旅の宿」のどちらを先におくかと迷ったことだろう。そして春の雨が一番強調されるのはと考えた末の結果なのだ。雨の音に目を覚まし窓の外を確かめると、暗く「まだ明けやらぬ」状態。旅の日程を心配する不安が窺える。

うたかたの時の行方や石鹸玉　前田夏野

「うたかた」は水の上に浮かぶ泡で、消えやすくはかないもののたとえにされる。そのたとえを「時の行方」に用いたことが新鮮である。すぐに割れてしまう「石鹸玉」にも相通じるものがある。読めば読むほど深い意味を感じてしまう。

春の泥下校児童の声高し　篠原さよ子

「春の泥」の道を下校の児らが通ってゆく。水溜りや泥道などに好んで入る児らである。「きゃっきゃ」と高い声ではしゃいでいる。「下校児童の」に工夫のあとが感じられる。

大村節代　選

鼓笛集

夏浅し富士の農鳥顕るる
故郷の母の面影茄子の花
小さき苗溺れさうなる植田かな

反町　修

背の丸き八十路の姉妹桃の花
「これこれ」とまづは山女に食らひ付く
酔ひ醒のコップ一杯春の水

武田重子

菖蒲湯に浸す孤老の身軀かな
夏安居の闇に手燭の尼僧かな
こつそりと昼の乾杯ビアホール

菅原卓郎

夏鶯やいざ婚活のハイキング
ぎりりと鳴りぬ旗手の奥歯や青嵐
さすらへど家背負ひのどか蝸牛

杉浦千祐

緑蔭の森はさはさはセロの奏
緑蔭の森に包まれ母胎中
散策の森にすずらん楚楚とあり

山岸久美子

屋形船夏至の日未だ灯を入れず
夏至の日の今日一日勤勉です
四万十の瀞に飛び込む夏至の吾子

北山建治郎

忌を修し帰路に老者の草笛を
城址をつつむ老者の草笛よ
万緑を溶かして池の満ちてをり

佐々木史女

陸離れ川に全身伸ばす蛇
日曜無き日本女性や日日草
母植ゑし松葉牡丹よ踏まぬやう

小林京子

皇居前土下座せし人夏あざみ
語り部は今や少なき敗戦忌
鉢形城北条亡び額の花　　千坂平通

手解きの記す法帳虫干す
草いきれ荷台押しやる厩舎主
帰省子の一卓に盛る夕餉かな　　篠原さよ子

印象派展へ緑雨を急ぎけり
万緑を望むレンタルオフィスかな
梅雨晴の一八階のティールーム　　遠藤人美

黒南風や高階で飲む紅茶味
黒南風や脇見もせずに直走り
頼りにす二世代強き夏の空　　南條きわゑ

葉桜や四十九日の香華かな
夏場所の溜り煌くデヴィ夫人
懸賞旗三廻りに沸く五月場所　　森美枝子

針金の夢のつり橋玉の汗
玉の汗美人づくりの湯で流す
桐の花天狗伝ふるお茶処　　小駒さち子

鼓笛集作品評

大村節代

夏浅し富士の農鳥顕るる　　反町修

長野県白馬岳では、春になると雪解けで岩が露出し、「代掻き馬」の雪形が現われるという。これを見て代掻きを行なうと、昔から伝えられている。片や富士山の農鳥（のうどり）は、四月後半五月中旬頃に現われる残雪で、田植えを行なう頃という。

他にも各地で色々な言い伝えがある。何れも農業国日本には、農作業に係わる言い伝えが多いと思うが、これ以上温暖化が進み、貴重な言い伝えが反故にならない様にと願う。

背の丸き八十路の姉妹桃の花
「これこれ」とまづは山女に食らひつく　　武田重子

八十路の姉妹の二人旅。二句目の下五の食らひつくが、気のおけない姉妹の様子が伝わる。お互い元気でよかったねと夜の更けるまで、しゃべって、飲んで、食べて、良い日、良き旅、いつの間にか夢の世界へ。

こつそりと昼の乾杯ビアホール　　菅原卓郎

こう暑くては一杯ビールを飲みたいと思うのも尤もな事。昼食に行くと言いながら、何故かビヤホールへ足が向く。上五のこっそりとが情景が浮んで、何とも楽しい。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）　綿引まりこ

立春のひかりコーヒーに渦巻く

散歩中カフェに立ち寄った。森の中のテラス席は、小鳥の囀りに春の訪れを感じた。

樹々の間から差し込む太陽は眩しく、その光は白い線となり珈琲に溶け込んだ。ささやかな日々の小さな幸せでした。

入会後すぐの句なので思い入れがあります。

訃報

季音同人　柚木　治子様

令和六年六月二十二日

御病気の為逝去されました。

謹んでお悔み申し上げます。

座談会 **最近の名句集を探る**

坪内稔典『リスボンの窓』　筑紫磐井『司会』
亀井雉子男『朝顔の紺』　浅川芳直
守屋明俊『旅鰻』　大西　朋

●巻頭三句
岸本尚毅
秋尾　敏
福神規子
亀井雉子男
二ノ宮一雄
碓井真希女

●今月の華
大元祐子／田島和生

●俳句と短歌の10作競詠
田中亜美／奥田亡羊

●人と作品
『塩野谷仁俳句集成』

七夕まつりレポート

●好評連載
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
井上泰至　俳句の詩語　イメージ辞典
神作研一　てのひらの江戸　――古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
堀田季何　諸家書架
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2024年9月号　8月20日発売　定価1100円（税込）

https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版

〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

水明通信
紅葉は照葉峡（てりはきょう）

秋谷風舎

紅葉に包まれた峡谷沿いの道を、バイクで駆けぬけた。長い紅葉のトンネルだった。四方八方覆い尽くす紅葉の世界を、潜り抜けた。紅葉が五km程続いた。からだ全体に紅葉が沁み込むような感覚だった。四半世紀程前のことだった。後日、この峡谷を照葉峡といい、水原秋櫻子が、照葉峡の紅葉を日本一、と称していたことを知った。

照葉峡は、北関東奥利根地方にある峡谷で、尾瀬が近い。峡谷には、秋櫻子が命名した翡翠の滝、つづみの滝、木精の滝など大小十一の滝がある。みなかみ町から片品村に通じる県道は、道幅が狭く、峡谷に沿って蛇行している。

沼田から照葉峡を目指すコースも良い。沼田ＩＣから国道百二十号線（沼田街道とも日本ロマンチック街道ともいう）を使い、片品村経由で照葉峡へ向かう。沼田市郊外には、林檎園が散在していて、紅葉の時期には、林檎狩りができる。十年程前には、ストーブにあたりながら、林檎園のオーナーの世話話を聞いた。何だか林檎がより美味しく感じられた。蕎麦屋も多く、そばが楽しめる。郷土そばとして名高い「断ちそば」もある。また、尾瀬をトレッキングした後の照葉峡は、新緑に覆われていた。照葉峡から、みなかみ町方面に向かうと、途中に宝川温泉がある。混浴の露天の湯だ。カップルが悠然と湯に浸かっているのを見たことがある。雪見露天風呂で知られている。

仕事の関係で、関西で十年程暮らした。これ幸いとばかり、関西一円の桜と紅葉の名所をことごとく巡った。紅葉では、奥駈道、談山神社、嵐山、鞍馬、大原、箕面、有馬、るり渓、屏風岩、熊川宿、鵜の瀬等々、これらの紅葉の景が脳裏に刻まれている。紅葉の関西一推しは、京都府南丹市のるり渓だ。

関西、若狭の皆さん、北関東の紅葉を見にきてください。北関東の紅葉の質感は、関西とは異なります。日光いろは坂や奥日光、奥鬼怒等の紅葉が有名です。谷川岳の紅葉もよい。中でも照葉峡の紅葉は、重力の呪縛から解き放たれたように感じられる。照葉峡の、頭から降り注ぐ紅葉を、水面に映える紅葉を、涼やかな渓流と滝を、青空のある日に、ぜひ体感して欲しい。十月上旬が見頃です。『花は吉野、紅葉は照葉峡』と私は思う。西行は、「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月の頃」と歌ったが、私は、「願わくは紅葉の下にて秋死なん・」と思う。しばらく紅葉の照葉峡に佇んでいると、頭の中が錦に染まってくる。

水明通信
ギャンブル

香田裕誌

カメラ片手に競馬競輪競艇場に行く。何処もギャンブルを目的とする人々が集うが面相が違う。競馬場には家族連れや品の良い人も多く女性もいる。競輪場は異様である。外れ券が床に散乱し喚く人もいる。皆レース表に食い入り予想屋に耳を預ける。レンズの先に人々の人生模様が見てとれる。写真には迫力が出る。私は賭け事には縁がない。

山紫集

網野月を選

母の日や暗緑色の茹卵　内田恵子

母の日の父は競輪いさぎよし　山下ユリ子

母の日や手首にたらり伸びたゴム　樋口元美

母の日は姑の日や花を買ふ　福田千春

母の日や泣き虫の児を叱りし妣　近藤徹平

母の日や遺品に父の恋文が　綿引まりこ

母の日よ丸く真ん丸めはりずし　高橋満耶子

母の日や母と本場のエスカルゴ　反町　修

母の日の母を自由にしてあげる　石川理恵

——以上特選

母の日に贈るまごの手皺の顔　山岸久美子

母の日や使はずじまひの肩揉み券　山中いちい

母の日や真夜を承知で待ちくれし　横山君夫

母の日や祝ひ祝はれ母子四代　横山礼子

母の日は吾の胃袋も満たさるる　吉川拓真

母の日や敬具で詫ぶる無沙汰かな　青木鶴城

母の日の昭和のかをり糠の床　秋谷風舎

母の日は雀卓囲む親子かな　新　暦文

母の日や母が小さく見ゆる日も　阿部幸代
母の日近し何が欲しいと子の電話　大場順子

母の日や母の享年するり超ゆ　荒井倶子
母の日の花多目に仕入る店主なり　岡田宣子

母の日や魚の腸はいつも母　飯田忠男
母の日や先づは遺影に手を合はせ　加藤でん治

母の日に扱き使はれてしあはせ　飯塚智恵子
母の日や「岩壁の母」を完璧に　川島夕峰

母の日や母の鋏でほどきもの　池田珪子
母の日や病臥の母へオルゴール　熊倉千重子

母の日や一番風呂に千の花片　池田雅夫
母の日やまだ越えられぬ吾も母　河野はるみ

母の日のラジオと唄ふ「岸壁の母」　石田慶子
母の日や母と言ふ名に生きし母　小林京子

母の日や孫より届く花の籠　井上玲子
母の日や母に似て来し母の癖　小山あつ子

母の日にエプロン姿甦り　上戸千津子
母の日や宅配でくる娘(こ)の気持　榊原聰子

母の日の母である身のうれしかり　梅澤輝翠
母の日や妣の好みし枇杷供へ　佐々木史女

野の花を手に少年の母の日よ　梅澤佐江
母の日や母となりたる子が集ふ　笹本啓子

母の日の愚痴交じりたる電話かな　遠藤人美
母の日の位牌の母へ思ひ馳す　篠﨑紀子

母の日や母の文字恋ふ雑記帳　篠原さよ子
母の日や笑ふ遺影へ飲めぬ酒　渋谷きいち
母の日や祝ひと小言何やかや　清水桂子
「母の日」や八十路越えるもあなたの子　嶋田洋子
母の日や昭和の母のオムライス　下川光子
母の日の肩のかぼそさ爪を切る　霜多光代
母の日に地蔵のつむり束子がけ　菅原卓郎
黙黙と待つが嬉しき母の日よ　菅原真理
けんかの後の母の日花束ドアノブに　杉浦千祐
文は一行母の日に着く宅急便　鈴木藻好
母の日やカードも淡きカーネーション　鈴木玲子
遅るるも母の日ブーケ猶嬉し　関谷多美子

母の日や大樹の下でおままごと　瀬戸雄二郎
母の日に拾ふ光陰くぢら尺　染谷風子
子は母に吾は子に感謝母の日よ　武田重子
母の日の昼の寄席見て大爆笑　田中章嘉
母の日や三代の母集まりぬ　寺内洋子
母の日や指の曲りの似てさびし　飛永　鼓
母の日や恋焦れたる母は居ず　南條きわゑ
母の日や形見の着物染め変へに　野村美子
あの鼻唄が聞こえて来さう母の日や　西幅公子
母の日の娘より来る旅信かな　野口和子
母の日や幼の画きし絵を額に　野田静香
寡婦なりし母を偲べり母の日に　野平美紗子

母の日や苦労始末の皺の数　畠中八重子

母の日や孫に手ひかれてディズニーシー　畑宮栄子

母の日や未完のままに小巾刺し　原田秀子

母の日と他の三百六十四日　日髙道を

母の日や居間の寝息に消す灯り　檜鼻ことは

母の日やもんぺ着こなす妣の写真　保坂翔太

母の日の勝手を占むる小さき母　曲淵徹雄

母の日の母と訪ふ「花やしき」　正木萬蝶

母の日や母に敵はぬ煮ころがし　松井由紀子

母の日や母を探せば野良に在り　松宮保人

母の日や祝ひ祝はれありがたし　丸屋詠子

母の日や亡母に唄ふ正信偈　丸山マスミ

母の日やそつと寄り添ふ子等とをり　宮﨑チアキ

母の日はレコード回し口遊む　持永喜夫

母の日や夫の十八番の散らし鮨　本橋稀香

母の日やこんな山路を宅配便　森　和子

母の日におしやれサンダル買ひにけり　森川義子

すぐ父になる子に祝はれる母の日よ　森下美智枝

母の日のビデオ通話の薄化粧　森　美枝子

山紫集作品評

網野月を

母の日や暗緑色の茹卵　内田恵子

「茹卵」はウェルダンにすると黄身のまわりが「暗緑色」になる。なんでも硫化鉄が浮くそうである。お母様がウェルダンの茹で卵がお好きなのであろう。上五の季語「母の日」が詠嘆の「や」切れになっているので、「暗緑色の茹卵」はさぞや印象深いことであったのである。もしかしたら、作者は半熟の茹で卵がお好きなのかも知れない。

母の日の父は競輪いさぎよし　山下ユリ子

座五の「いさぎよし」の理由付けは読者に任されている。居合わせない方が良いだろうという配慮なのか、煤逃げの理容室と同じことなのか、ギャンブルでひと稼ぎして何かプレゼントを用意しようとしているのか、読者は想像をたくましくして鑑賞するのである。座五でダメを押す作法を用いている。

母の日や手首にたらり伸びたゴム　樋口元美

中七座五の「手首にたらり伸びたゴム」は、着衣の袖口に縫い込まれたゴムではなくて、手首に輪ゴムを巻いているそのゴムであろうと想像した。お母様が何時もそうして家事に勤しんでいらしたのではないか、母の日にはその光景が沸沸と脳裏に浮かんでくるのである。遠方にお住まいなのか、鬼籍に入られているのかは定かではないが、お母様のそうした習慣が思い出されるのである。「たらり」の表現から一本の輪ゴムではなくて複数の輪ゴムのように思われる。

母の日は姑の日や花を買ふ　福田千春

夫唱婦随の作者を想像する。夫婦が互いの義母に尽くし合うのは二人の関係が上手くゆく秘訣の一つであろうか。そうして、永い間の夫婦の歩みが形成されてきたのである。座五の「花を買ふ」は作者にとって、どのような心持の行為であったのであろうかと、読者は想像しながら読むのである。

母の日や泣き虫の児を叱りし妣　近藤徹平

中七の「泣き虫の児」は誰であろう。筆者が思うところは、

作者ご自身ではないかと言うことである。「男の子は人前で泣くものではありません」という亡くなったお母様の声が聞こえてくるようである。折り目の正しいひたすら厳格なお母様でいらしたのではないかと思う。そのようなお母様を作者は子供心に恨めしく思ったこともあったのである。が今になって思う時、厳しく躾けてくれた母の心底にある情愛の深さに気づく昨今の作者なのである。作者もまた「母の日」を詠むとき、嘗ての男の子になってしまうのである。

母の日や遺品に父の恋文が　　綿引まりこ

意表をついている句意であるが、無いことではない。事実なのかどうかの詮議よりも、俳句にしてしまおうという作者の気概が面白いのであろう。そして父と母の仲睦まじいことを思い起こして心温まるのである。

母の日よ丸く真ん丸めはりずし　　髙橋満耶子

中七の「丸く真ん丸」の加重したリフレインが好ましい。この句の胆の部分である。どうして握ったのかも分からないくらいに大きくて手に余るし、口径にも余る「めはりずし」である。上五の「母の日よ」から、お母様がこの「めはりずし」を作ってくださっていたのであろうことが想像される。母の日に母にまつわる話を思い出し、「めはりずし」を見てはまた母を思い出すのである。簡単な取り合わせの句なのであるが、その簡潔さがかえって母との紐帯の深さを物語っている。

母の日や母と本場のエスカルゴ　　反町　修

この句もまた、母を想う時「本場のエスカルゴ」を食した思い出が回帰してくるということである。そして「エスカルゴ」を食す時、頭の中にあるメモリーから母親の面影が引き出されてくるのである。どうしてか、一定のジェネレーションから上の皆さんは、母親と食物との関係性が多いように思われる。証明はできないのだが、何となくわかるような気がする。筆者も同様であるから。掲句は幼い時の食べ物の話ではないのだが、それでも食に関しての母親の記憶が脳裏に収まり易いことは生理現象としての潜在的な意識なのかも知れない。

母の日の母を自由にしてあげる　　石川理恵

「母の日」の句には珍しく、一種のパラドクス的な表現を試みている作句である。人気者のお母様は引っ張りだこなのであろう。もしかしたら幼いころの記憶かも知れない。一日中家事に子育てに忙殺されるお母様を身近に見て、忙しさから解放することが一番の母への贈り物であることを作者は皮膚感覚で知っていたのであろう。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子　報

悲し気な騏驎の眼日日草　チアキ
不器用な前座の枕茹る夏　徹平
御用提灯揺るる花道夏舞台　喜恵
触るる人も撮るひともなし日日草　由紀子
宮内庁御用達とやこのメロン　和葉
能登瓦の破片のひかり日日草　マスミ
市役所に窓口いくつ日日草　和子

――以上特選

ゴーグルと水着を加へ旅用意　稀香
次の間に螢を放つ用意せり　順子
神鶏の歩みくきくき日日草　マスミ
日日草一直線にバイク行く　節代
今日も無事明日も無事なれ日日花　由紀子
ママちやりに双子の園児日日草　卓郎
銀座通り色の賑ふ日日草　はるみ
日日草母子乗りたる辻り台　徹平
雑用といふ仕事のなけれ河鹿鳴く　京子
蜘蛛の井の銀に閃めく用水路　拓真
日日草今日は疲れた遊びすぎ　和葉
八十路とて暮し上手や日日草　喜恵
日日草色とりどりに遊園地　チアキ
買ひ足せし用土いろどる日日草　和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城　報

日は西へ山に満月錦鯉　士史
老人のからだ傾げて歩む夏至　峰雄
丹頂の鯉の葉蔭に蒼ざめて　いちい
枝豆の莢の端剪る銀鋏　みどり
老老男女の眼科待合夏至正午　鶴城

――以上特選

裏庭の香草ちぎる夏至の朝　妙子
船橋屋緋鯉六匹客迎ふ　利子
天神の亀の子背負ふ願ひかな　サカエ
黄昏のゆるりゆるりと熟るる枇杷　竺仙
深きより予言を告げに金の鯉　いちい
眼下には月に照らさる錦鯉　士史
錦鯉に混じる真鯉の矜恃かな　峰雄
振り袖の姫の如きや錦鯉　みどり
真価とは容姿に非ず錦鯉　鶴城

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄　報

昭和の世に忘れ物して昼寝覚　順子
揺り椅子のいつかゆりかご昼寝夫　〃
身の箍のすべてが外れ大昼寝　〃
映り込む事件現場の濃あぢさゐ　理恵
夕間暮れ水打ちながら憶ふ人　徹雄
縄文の世に昼寝する遺跡掘り　昇

――以上特選

夏の月浮べて酌まむ夜光杯　順子

昼寝人迫る豪雨は夢の中　星歩
そよ風に揺るるカーテン昼寝どき　千祐
彫物の透けし背中や三尺寝　萬蝶
笹原の風のさざめき走り梅雨　雅夫
大の字に野原に昼寝する漢　康世
更衣身軽になりし余生かな　喜久
父と子の相似形なる昼寝かな　理恵
新緑や風を握つて拳を打つ　徹雄
棟梁に風上譲り三尺寝　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

六月や傘の彩る通学路　修
六月来チャペルに弾む婚の鐘　昇
蕗の葉に身を隠したる石仏　寛治
伽羅蕗や祖母母わたしそして子も　由紀子
蕗の葉に眠気をさそふ雨の音　延昭
蕗伸ぶる秋田おばこの背丈ほど　光子
田をわたる風の青さよ六月来　玲子

——以上特選

六月や兼用傘の内は黒　由紀子
蕗を煮て地酒たのしむ宵の膳　マスミ
大輪の花こそ似合へ六月は　行雄
伽羅蕗や酒豪揃ひが居残りぬ　でん治
六月の披講の声は絶好調　光子
蕗刈りて傘寿の父の雨宿り　暦文
六月や赤き長靴ねだる稚児　翔太
六月や局面打破の妙手打ち　恵子
六月の月あはあはし友の逝く　玲子
六月の社務所に人の気配無く　寛治
伽羅蕗を当てに地酒の坊泊り　延昭
蕗の葉の雨を知らする昼餉時　修
雨の夜や蕗煮に滾る落し蓋　昇
六月の軽く転がすピザカッター　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

蝸牛葉裏密談進行中　はるみ
木漏日に色を与へて青嵐　〃
廃線の鉄路の荒び青嵐　義子
青嵐杜の騎馬像ギャロップす　知子
風紋の乱るる砂丘青嵐　宣子
名刹の風鐸の音や青嵐　佐江
蝸牛潰さぬやうに雨意の径　〃

——以上特選

下校児の虜となりし蝸牛　義子
青嵐保存極むる白川郷　宣子
青嵐スクランブルの交差点　知子
少年の宝物とや蝸牛　美佐尾
青嵐戦場ヶ原駆け抜ける　玲子
青嵐応援団旗ひるがへる　千祐
野も街も翡翠色なる青嵐　はるみ
銀輪を立ち漕ぐ男の子青嵐　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

禁断の木の実へ誘ふ山棟蛇　月を
蛇入るや青き戦ぎの潦　佐江
くちなはのうねる光や神の庭　マスミ
蛇の衣の塔婆に絡む成就かな　稀香
ささやかに水脈ひく蛇や月明り　京子
深入りせず橋の袂の夕涼み　はるみ
蛇くねる残像となりてもくねる　ひろこ

——以上特選

熨斗蛇やせうせう遠き道の幅　月を
入口の演目みつめ夏芝居　慶子
蛇入りし叢として戦ぎけり　ひろこ
蛇落ちて弁天池をざわつかす　千春
やる気注入進学塾の夏期講習　千祐
音もなく泳ぎ切る蛇沼明かり　マスミ
池渡る蛇自由形平泳　はるみ
蛇受難イブそそのかす汚れ役　稀香
懐に紙入れのぞく祭衆　京子
入れ揚げの末路言ふまじ汗拭ひ　鶴城
入相に冷酒染むる胃の腑かな　星歩
入念に探し物する夏の暮　詠子
真珠育む朝の入江や月見草　佐江
道連れは蛇追分の常夜灯　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

黒南風やドックの巨船浮き沈み　玲子
黒南風やじわじわ上る海水温　満耶子
郷里産の鯵に友等と逢ふ心地　千津子
梅雨晴間ネクタイ赤き勝負服　道子
蚯蚓鳴き魚釣り準備怠りなし　洋子
黒南風や白波たてて救急艇　和子
すくと立つタカラジェンヌや立葵　早苗

――以上特選

黄雀風（こうじゃくふう）点となりゆくフェリーの灯　玲子
遠くより梔子の香や明日雨かも　千津子
黒南風や明日はポリープ切除の日　洋子
み熊野の黒南風すさぶ島泊り　和子
黒南風や空のトロ箱にほひけり　道子
祈祷師の庭一面の四葩かな　千枝子
幽玄の世界へ誘ふ初螢　満耶子
駅ピアノひたすら弾くや七変化　千世子
古民家の縁にぽつんと螢籠　きわゑ
黒南風に動ぜぬ漁師底引網　嶋田洋子
黒南風や大吊橋は無頓着　早苗

☆　☆

昔話あれこれ40

実頼の三男斉敏（ただとし）とその子

子息は三人、高遠、懐平（かねひら）、実資である。実資は祖父の実頼が自分の猶子とした。

小野の宮右大臣実資

実資は隠れた資産家であった。故実頼の資産の多くをこの殿が受け継いだようだ。

対の屋・寝殿・綿殿などは普通の貴族の邸宅と同じであるが、東南の方角に念誦堂を建て、多くの御仏を祀り名のある賢僧や、智者を住まわせた。

これらの僧を手厚く持てなし、自分の「滅罪生善（現世の罪障を滅し、来世の善を得る）」の祈りや、大切に傳いているかぐや姫の息災を祈った。

実資の北の方は為平親王の娘婉子女王。（婉子女王は、花山天皇に入内し、女御となったが、六か月後に天皇が出家したため、後に実資の妻となった。）

太政大臣頼忠

頼忠は実頼の次男である。大臣の位で十九年、関白（円融帝の）として九年務めた。この世の栄華を極め、一生を幸福に過ごした。

一条天皇が即位されて外戚でなくなり、関白を退任した。ただの太政大臣として務め、四条の宮に長女の遵子（じゅんし）と一緒に住んでいた。

頼忠は摂政関白であったが、平服で参内する事は無かった。帝に奏上すべき事がある時は、布袴（束帯に次ぐ礼装。）で参内した。そして清涼殿の殿上の間に控えており、蔵人などを通して奏上した。帝が鬼の間にお出ましになり、お召しがあった時にだけ参上した。関白であっても、帝と血縁がなかったので、遠慮したのであろうか。

頼忠の子女

代明親王の娘との間に、二人の女と一人の子息がいた。長女遵子は円融帝に入内し、天元五年（９８２）中宮となった。藤原兼家の娘詮子は女御のままであった。頼忠の子息公任は、兼家の邸の前で、「このお屋敷の女御は、何時になったら后に立たれるのだろう」と放言したので、兼家や詮子の恨みを買った。

遵子中宮にはお子が無かった。

一条帝が即位され、第一皇子の母君の詮子が后になった時、公任は、詮子の女房から、「妹の素腹のお后は何処においでですの」とやり返された。（つづく）

各地句会

若枝句会（浦和）

螢火の誘ふままに藪を漕ぐ　敏江
清流のまほらま追ひて舞ふ螢　泰子
連れ立ちて吾子と戯る螢の夜　美佐子
鳥去りて湖面をたたく男梅雨　泰生
さりげなく平癒祈りてさくらんぼ　みどり
みどり児のふあつとあくびさくらんぼ　貞代

めだか句会（浦和）

ほととぎす風静まりて古寺の道　美津子
時鳥一息ついてみちのくへ　哲生
梅雨入りの空見上げてはひとり言　千鶴子
夕立に街の和太鼓鳴り止まん　荘志
放心の公衆電話夕立過ぐ　六弦
紫陽花や言伝て忘れ今朝の雨　章嘉
言の葉の修業中です青林檎　灯留
夕立来るまだよまだよのあれよかな　楽
一斉に動き出す街夕立去る　知子
水たまりはしやぐ長靴夕立あと　和子
姑に逆らはぬ夫不如帰　月を
失言を咎むる乙女冷し酒　鶴城
浅き寝の夢に誰やろ時鳥　はるみ
ポツリ来た聞いてないよと夕立雲　三茅

新樹の会（浦和）

若竹のそよぐ山道通学路　平通
若竹や近江の里に女寺　道を
若竹を断つて別れの酒杯とす　風子
禅堂に響く警策今年竹　徹雄
待ち人の竹の若葉に見え隠れ　鶴城

神戸大池句会（神戸）

退院のほつと一夜を髪洗ふ　玲子
艶やかや嘘を知らない茄子の花　千津子
時の日や八十路真中の誕生日　早苗

若鮎句会（浦和）

ねぶの花穂先に宿る金の糸　ひとみ
黄金のジパング何処黄金虫　芳春
じりじりをさはさはとゆく夏衣　真
独り居の父の自適や夏衣　稀香
空晴れて満艦飾の夏衣　貴
線香を焚いてうからの夏衣　道郎
姿見の面影辿る夏衣　香音子
夏衣纏ふ鏡に母を見ゆ　秀子
ここからがかにくさはしの柚子の花　拓真
番傘の帯に雪輪の夏衣　月を
下駄音の揃はぬ二人夏衣　鶴城
夏衣小六までの継ぎのあと　喜夫

若楠句会（浦和）

青葡萄みんな光へ向いてゐる　京子
五月晴目的のなき旅路かな　葉子
夕凪や句碑を巡りて坂の町　直子
夕凪や穏やかな生甘受せり　香里
手塩かけ袋もかけて青葡萄　真由美
青葡萄簾を取りし軒を這ふ　風舎
的を得ぬ答へつらつら夏議会　鶴城
反抗期まだまだ食へぬ青葡萄　宏治

水明熊谷句会（熊谷）

届けたし草笛の音佐久までも　秀子
青海波の器に鎮座冷奴　道を
草笛が草笛を呼び響き合ふ　燈女
万緑へ始発電車の動き出す　栄子
山青葉黒部第四発電所　徹平
渡し場の爺の草笛遠赤城　卓郎
申し分なき妻をとなりに冷奴　風子
手術終へ常のあかりや冷奴　茂子

円卓の会（浦和）

天つ風百合の香残し墓碑を去る　静香
沙羅の花魚鼓の鳴りたる古刹かな　修
美しき水通る体や半夏生　拓真
半夏生手紙を破り髪を切る　翔太
涼風やメレンゲの角つと立ちぬ　京子
逆転の無罪判決夏の雲　道を
冷酒酌む切子グラスに映ゆる海　輝翠
夏落葉集めて文を焼き尽くす　月を
冷し酒根を生やしたる胡座かな　鶴城

小梅の会（浦和）

江ノ電に光る黒髪夏到来　隆文
武蔵野の肥やしとなりぬ樫落葉　進
あめんぼう走る水面に白き雲　恵子
短夜や消えぬ灯りが窓を掃く　隆然
喪帰りの背に染み入る蟬時雨　道を

俳句の手ほどき（岩槻）

尾道の直哉の寓居月涼し　延昭
焔立つごと行人坂の極暑かな　佐江
例刻に点る外灯夏館　義子
金毘羅へ石段二千瀬戸は夏　徹平
青田風旧家へ続く九十九折　翔太
出目金眠る江戸の名残の金魚坂　幸代
「例へばね」ときり出す話梅雨ぐもり　桂子
夏祭例にならひて奉納す　美子
滑り台でんでんむしが逆走す　忠男
汽車喘ぐひと山越えの夏至の宵　卓郎
雲の峰八十路の坂を踏みしめり　久美子
郭公の声を間近に登るかな　チアキ
生垣の紫陽花拾ひ町の坂　知子
どの道も海へとつづく青みかん　かつ子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

火取虫かつて特攻強ひし国　延昭
生垣は今つる薔薇の晴れ舞台　美枝子
更衣つんつるてんの嬰の服　倶子
首筋の黒子がちらり更衣　洋子
夜明かしのゲームセンター火取虫　早都子
梅雨晴間二千歩目指す試歩の杖　健司
朝まだき農婦勤しむ梅雨晴間　由美子
赤提灯へ一番乗りの火取虫　昇

蝌蚪の会（浦和）

青光りに惹かれ群れゆく海月かな　夏野
アダージョに連れ舞ふ海月水族館　ひさの
風薫る大気一面ただよひて　しるく
終電の終着駅やビール買ふ　風舎
彫刻の上で遊ぶ子風薫る　さち子
満天下蟬時雨ふり湖上駅　礼子
道の駅いちご大福風薫る　元美
風薫る錆びた身体にミントティー　幸子
鈍行の乗り換へ駅のソーダ水　秀子
游睡の海月は夢を見るかしら　月を
駅弁の赤き達磨や夏太鼓　鶴城
夏の月閑かに凜と廃駅舎　宣子

たかんな俳句会（川口）

短夜に小さきものの羽音きく　のり子
午前二時未だ短夜続きをり　小麦
鳴るはずの目覚し鳴らず明易し　義子
仙人髭の舎弟菜食糸蜻蛉　鶴城
明早しレース間近の伝書鳩　静香

珊瑚の会（浦和）

冷酒酌む仲なりここは六本木　史代
安心のための検診梅雨晴間　広子
父が居て子がゐて孫居る冷し酒　和子
愛らしき声を思うて冷酒酌む　和葉
盛切（もっきり）の冷酒一ぱい今日終る　かつ子
冷し酒男勝りの姉二人　喜恵
梅雨晴間早や甲羅干す亀二匹　マスミ
夕映えを肴に加賀の冷し酒　昇
梅雨晴間偲べり遠き友のこと　光子
カンバスの木枠の香り梅雨晴間　恵子
ガード下に三三五五来冷し酒　節代

皐月の会（浦和）

じゃんけんで勝つて双児のさくらんぼ　山菜
桜桃や尾根の夕陽を染め上げて　更穂
夏出水名水の郷いたましや　光代
過ちを告ぐれば夕焼懺悔室　珪子
涸梅雨や過敏に花はしぼみけり　紀子
濾過さるる体すがしや岩清水　静香
沢蟹もそれを追ふ子もすばしこく　暦文
ざり蟹を糸垂らし釣る少年期　美佐尾
過し日の「甘い生活」さくらんぼ　きいち

野ばらの会（浦和）

足あげてちよろりとポーズ蜥蜴の子　栄子
灯台の白さ際立つ青蜥蜴　夏江
一夜にて濁流と化す夏の川　茂子
青とかげ太古知りたる顔をして　秀子
瑠璃蜥蜴見て見ぬ振りの昼下り　みき子

若狭水明会（若狭）

どの部屋も物で一杯梅雨の家　郁子
終はりなきくせ毛と格闘梅雨の朝　友夏
梅雨空や閑けき午後の診療所　保人
笑ひ会ふ早口ことば時鳥　八重子
梅雨籠り捨つる事のみ考へて　初花
緑陰の風を袂に旅の僧　寛久
引き出しの軋み生ずや梅雨湿り　祥子
やはらかき若狭の人や時鳥　ことは
梅雨空や稲作暦六枚目　笑風
喪の家の人声湿るついり哉　和風
ゆらゆらと小舟をゆらす初夏の波　白鷺

水明澪つくし句会（大阪）

嘴に大空翔ける蚯蚓かな　智恵子
身捩れば鉄色増せる太みみず　人美
蚯蚓鳴く愚痴連ねたる日記かな　洋子

櫟の会（浦和）

覗き見る我を目高は見上げたる　あつ子
涼しげに苦労話をする母よ　朋子
生きし事肌に感ずる涼しさよ　裕誌
駒の足洗ふせせらぎ音涼し　富子
藻に孵化し少子化は無の目高達　文子
月涼し祈りをこめてのむ薬　治子
低音の読経沁むるや寺涼し　千重子

鶴川山百合句会（町田）

かたつむり戦ひもせず逃げもせず　雄二郎
かたつむりアイヌ童話のポストマン　月を
ゆふぐれはホルンを鳴らすかたつむり　史代
かたつむり電柱が立ち家が建つ　広子
蝸牛葉つぱに乗りてわが家行　由美子
かたつむり旅の途中や我もまた　千春
でで虫や沓脱ぎ石に対の下駄　萬蝶
重きもの背負うて人もでで虫も　理恵
好きな時すきな場所泊かたつむり　美千子
伐採を待つ老桜や赤き紐　うさぎ
葉から葉へ大きな伸びを蝸牛　玲子

あゆみの会（浦和）

青蜥蜴踊る尻尾の置きみやげ　啓子
青嵐山からおりて皆笑顔　山遊
菩提寺に名代の古木青嵐　倶子
青嵐狂気の如く風見鳥　和
干し物の片寄る竿や青嵐　重子
縁石で猫と対峙の蜥蜴の子　藻好

きざきサークル（浦和）

車寄せに開化の名残夏館　昇
筍掘る老の一徹まだまだまだ　光子
夏館サザンの海を一望す　健司
夏館青児の女立たせたし　倶子
代々の当主の写真夏館　啓子
阿檀熟れ月桃紅き夏館　由美子
夏館赤いポルシェの空吹かし　和
筍や大地の恵み両の手に　和枝
たかんなを剥く戦争の記事の上　和子

芙蓉句会（浦和）

つまみつつ恋を語らふさくらんぼ　税子
オンザロック肴と言はずさくらんぼ　仁
夏の夜の血圧計の加圧かな　美子

和歌山水明句会（和歌山）

黒南風や帆を畳み泊つ練習船　和子
青梅もぐ紺の作務衣の背負籠　道子
黒南風や帽子目深に医者帰り　千枝子
学校へ欠席電話額の花　千世子
飛べぬまま逝きし小鳥や都草　満耶子
六月や破れ襖に絵を張りぬ　きわゑ
美容室の自惚れ鏡七変化　洋子
雨をんなひかる梅雨茸見にゆかむ　廸代

青葉の会（浦和）

正面に富士を仰ぎて帰る夏　美紗子
青青と噴き出す息や夏木立　真理
富士映す湖やポプラの夏木立　美智枝
五重の塔のごとく凌霄正門に　公子
逞しき吾子の太腕夏木立　啓子
夕暮の子供広場や夏木立　美子
ビルの谷間に夏の木立と奥の院　洋子
夏暖簾分け入れば時ゆつくりと　和子
指と指十五の夏の木立かな　輝翠

雛の会（浦和）

山小屋の丸寝の夜や明易し　公子
蠅叩小銭ばかりの貯金箱　喜恵
老の手の手加減なしの蠅叩　燈女
短夜や寝たらぬ顔を化粧せし　チアキ
屈理屈をこぬる十五の夏休み　輝翠
柱に吊られ昭和を醸す蠅叩　佐江

りそな俳句会（浦和）

屋形船夏至の日未だ灯を入れず　建治郎
はや明くる北の大地の夏至の朝　道を
暮れ惑ふ夏至の連山眼前に　寛治
夏至来る出羽三山の水早し　勲
徹夜明け寝かせておくれ行行子　久美子
沈む日に深き一礼夏至来る　マスミ
葭切や暮れ残りゐる三日月湖　雅夫

繭の会（浦和）

街灯の火蛾みる星の王子さま　珪子
火取虫離れし家族の遠灯り　夕峰
虹立ちて保育器の吾子笑ひ入る　まりこ
梅雨晴間重機列なすプロジェクト　さよ子
梅雨晴やハンバーガーの濃き匂ひ　風舎
梅雨晴や雲をまとひし高き山　寿夫
新刊の香りと帰る梅雨晴間　律子
梅雨晴や地球は丸き室戸岬　和子
梅雨晴や心の霧も吹き飛びぬ　伸子
梅雨晴を使ひ切つたる午後六時　小麦
火蛾狂ふ八百屋お七の恋のごと　風子
断梅や挨拶文のぎごちなし　月を
薫風や古書とカレーを神保町　鶴城
蔓物のみるみるからむ梅雨晴間　京子

水明鬼石句会（鬼石）

大雨に弓なり倒る夏葵　聰子
窓覗くホバリングして夏燕　和子
びわの実の色あざやかに光りけり　ナオ子

りんどう俳句会（浦和）

螢火や母に抱かれて居る写真　寛治
やはらかに闇を切りゆく螢かな　君夫
初螢瀬越し飛び急く余生かな　弘夫
今少しこの旅したし夏の月　治子
自分史に空事少し恋螢　風子
悠然とゆるる大楠月涼し　徹雄
夢二画に似たる美人や夕螢　翔太
裸の子太平洋へまつしぐら　順子
洋館は浪漫の香り白薔薇　まりこ
湯上がりの火照る身体や夏の月　夕峰
五箇山の田水まんまん夏の月　利子
洋菓子の剥すセロファン夏至真昼　卓郎

芽吹句会（浦和）

半玉の濡るる朱唇や冷奴　修
井戸水を口に含めば夏の月　久美子
嫁入舟ゆくよ水郷花あやめ　千重子
桐咲けり素顔の似合ふ帯姿　ひろこ
家囲ふ足場鬱鬱梅雨に入る　富子
冷奴ほろ酔ふほどに姦しく　玲子
掌より滴る水や冷奴　チアキ
墓を守る人は見えねど桐の花　道を

柿の木塾（浦和）

かはせみの礫一瞬光りけり　かつ子
雨晴れや茂りに埋まる天守閣　昇
茂る草落人村に辿り着く　節代
里山の茂り裾野をゆく葦毛　恵子
雑草の茂みの中の石地蔵　章嘉
翡翠やカメラアングルその先に　和葉
かはせみの瑠璃をつくして飛び立てり　和子

櫻蔭句会（浦和）

夏の川淵へ投網のひかりかな　由紀子
初夏の海照りて彼方の烏帽子岩　多美子
山峡の瀬音軽やか夏の川　真理
梅雨寒や大小ふたつ照る坊主　美子
万緑と長谷の大仏相照らす　茂子
昼の照り萎えず踏んばる胡瓜苗　公子
木々の間を電車と走る夏の川　千恵
白壁の家並浮かばせ夏の川　久美子
夏の川土手に「玉屋」の声しきり　行雄
客望む東照宮へ梅雨晴間　美智枝
人声も水際（みぎは）も遠し夏河原　幸代

ミモザの会（横浜）

万緑や平和の文字のある墓石　亜弥子
江戸遠し象の山車行く日本橋　玲子
御朱印の行列長し風薫る　詠子
風薫る姉と二人で汽車の旅　由美子
風薫る腹式呼吸できぬまま　栄子
ニンフも孕むらし子安貝夏の浜　史代
新人の女船頭風薫る　慶子
薫風やスケッチの髪うねり出す　萬蝶
塩揉みの香の立つ厨風薫る　千春

山茶花（浦和）

木いちごの枝から枝へリス飛びし　美江子
身の丈に合はす縫針更衣　マスミ

野菊の会（与野）

眼裏は引く波ばかり山紫陽花　美代子
母がゐてその母がゐる日日草　和子
雪の下こんなところに喫茶店　清子
空の色海のいろ好き更衣　倭子
青嵐抱へる画布は帆となりて　恵子
麦の秋和紙に透けてる和三盆　光子

「りんどう忌」のご案内

［と　き］2023年9月30日（月曜日）13時受付

［ところ］浦和東口パルコ10階　第13集会室

［会　費］1,000円（昼食、飲み物は各自ご持参下さい）

投句数および兼題、投句締め切り時刻、申込書などの詳細資料は、次号9月号にてご案内いたします。

事業部

風　声

○**現代俳句**六月号――「現代俳句の風」欄

風吹けばレディ夏帽押さへけり　秋谷風舎
薔薇の芽に棘人間に毒舌　永野史代
横綱へ白真四角の大団扇　大橋廸代
大賀蓮崩るる前にある気品　西浦千枝子

○**現代俳句**六月号――「『現代俳句年鑑２０２４』を読む」欄

中村亜希子氏の感銘十句抄に
看護師の探る血管そぞろ寒　五明　昇
みうらまさみ氏の感銘十句抄に
麗しき少年の透く青簾　小林京子

○**くぢら**（中尾公彦主宰）六月号――「受贈俳誌美術館」欄

慎ましく句碑を浮かせり芝桜　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）六月号――「諸家近詠」欄

春炬燵足で挨拶して去ぬる　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）六月号――「受贈誌の一句」欄

寒林の踏み入る先の瀬音かな　新　暦文
雨粒を染むるほどなり花ミモザ　菅原真理
（日高道を抄出）

水明競詠（令和六年）

恒例の季音・水明全員が対象の水明競詠です。
ふるってご投句下さい。
掲載は十一月・十二月合併号になります。

兼　題　「新涼」「秋涼し」「涼新た」の傍題に限る
「朝顔」「牽牛花」の傍題に限る
「会」（詠み込み）※秋の季語で詠む

句　数　三題通じて五句

締　切　九月二十五日

投句用紙　九月号巻末に添付

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和六年六月三十日現在―

渋谷きいち　3口
大橋廸代　10口
葛城千世子　5口
西浦千枝子　10口
十倉正純　10口
南條きわゑ　5口
高原和子　3口
川崎道子　10口
高橋満耶子　5口
笹本啓子　5口

全国大会より

荒井倶子　2口
秋谷風舎　3口
飯田忠男　1口
飯室夏江　2口
石井喜恵　2口
石関六弦　1口
石田慶子　1口
井上燈女　3口
梅澤輝翠　5口
梅澤佐江　2口
大塚茂子　2口
大場順子　2口
石山かつ子　2口
大村節代　2口
岡田宣子　1口
緒方みき子　2口
倉田星歩　2口
河野はるみ　1口
越田栄子　10口
五明　昇　3口
笹本啓子　1口
島津初花　5口
菅原真理　2口
清水桂子　1口
鈴木玲子　1口
染谷風子　2口
鳥羽和風　30口
西幅公子　1口
野田静香　3口
野村美子　1口
日高道を　5口
福田千春　1口
保坂翔太　1口
星野和葉　2口
曲淵徹雄　3口
正木萬蝶　2口
町野広子　1口
松井由紀子　1口
丸屋詠子　1口
丸山マスミ　2口
宮﨑チアキ　2口
本橋稀香　1口
森　和子　1口
若狭水明会　20口
山岸久美子　15口
石川理恵　3口

―合計223口―

誤植訂正

七月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○今月号巻頭句

正　清水桂子　綿引まりこ。
誤　清水佳子　綿引まり子×

後記

暑中お見舞申し上げます。

水明の語り継がれる晴れの奇跡が、今年の全国大会でまた起こりました。天気予報は前日まで大雨で、天気図も大雨が関東に向かっています。水明の晴れは、いよいよ終りかと思いました。

ところが、前日の夜から雨が小降りになり、当日の朝は薄曇、大会の開会の頃には薄日が差し、途中からお日さまぴかぴかになりました。やはり晴れたと無事に大会を終えました。九月号で大会の模様と大会句の選をご報告します。

去る七月九日、二十年ぶりに新札が発行されましたが、ご覧になられましたか。偽造防止のため二十年で新札を発行するようです。インキ、すき入れ、3Dホログラム、深凹版印刷、特殊発行インキ等、国立印刷局の技術の粋を集めた新紙幣を見たいですね。

ところで七月十八日の朝日新聞天声人語に共感しました。

「近所のスーパーに少し前、無人レジが導入された。ずらりと並ぶ端末の中で、現金を受付けるほうが少数派なのには驚かされた。どうやら、自分のような現金派は、時代遅れになりつつあるらしい。

「キャッシュレス化がもっと広がればいつしかあの世に行く時、三途（さんず）の川のほとりで渡し賃をとる番人から言われるだろう。〝お支払はｐａｙｐａｙですか、現金ですか。〟やれやれ」

やれやれ私も未だに現金派です。三途の川の渡し賃も現金でと思いますが、ｐａｙｐａｙだけになってしまうのでしょうか。

コロナはじめ色々な感染症が流行っているようです。熱中症も重篤のようです。皆様どうぞ、お気をつけ下さいませ。（節代）

今月のはてな？

日箭（ひや）
閃閃（せんせん）
迚（とて）も
千早（ちはや）
水夫（かこ）
口噤（くちつむ）ぐ
跼（かが）む
扱き使（こきつか）う
小巾刺（こぎんざ）し
正信偈（しょうしんげ）

〃 65 63 61 50 48 44 40 18 14 頁

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和六年八月号
通巻一一二七号
令和六年八月一日発行

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話　048−822−四七四一
ホームページ　「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三
発行人　山本鬼之介
印刷所　中央美版

〈令和６年りんどう忌〉

参加申込書《申込締切　９月20日》

りんどう忌　9月30日（月）	参加費　1,000円	出席します

※「出席します」を○で囲んでください。

◎米寿（満88歳）および喜寿（満77歳）を迎えられる方は自己申告してください。

・米寿を迎えます	・喜寿を迎えます

※「米寿を迎えます」「喜寿を迎えます」を○で囲んでください。

上記参加費を添えて申し込みます。

2024 年　　月　　日

住　所	〒		
氏　名		電　話	―　　―

［緊急連絡先電話番号］

電話番号	―　　―
電話所有者	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届け下さい。
（緊急時のみに使用し他の用途には使用しません。）

《申込書送付先》〒330−0064　さいたま市浦和区岸町4−10−21　水明俳句会

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

季音　雪・月・花

十月号　八月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

水明集

十一・十二月号　八月二十五日締切

きりとりせん

都・市・町名	氏　名（俳　号）
都市町	

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

きりとりせん

山紫集

十一・十二月号　八月二十五日締切

十一・十二月の兼題「鰯　雲」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

季音抄

山本鬼之介

山葵田に映りし山を手で崩す　大村節代
空の色海のいろ好き更衣　小倉倭子
水底の日暮れ見にきてゐる蜻蛉　栢尾さく子
桐咲けり素顔の若き帯姿　菊池ひろこ
縄文の世に昼寝する遺跡掘り　五明　昇
太棹の煽るじよんがら夏旺ん　境　延昭
路地風鈴ひとり通れば一つ鳴る　渡辺舎人
焔立つごと行人坂の極暑かな　梅澤佐江
螢火や母に抱かれて居る写真　高島寛治
裸の子太平洋へまつしぐら　大場順子
六月の雲はずしりと山憮然　松井由紀子
羅や合せ鏡の照り返し　丸山マスミ
時の日の生き生き告ぐる鳩時計　横山君夫
蝸牛葉裏密談進行中　河野はるみ
自分史に空事少し恋螢　染谷風子
Jアラート鳴るや泡ふく磯の蟹　渋谷きいち
走り終へ遠き眼差しダービー馬　曲淵徹雄
銭湯の牛乳一気夕薄暑　保坂翔太

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

炭団坂登る下駄音夏近し　菅原真理
桐の花火の見櫓のある役場　新暦文
老舗ホテル若葉の中の車寄せ　岡田宣子
短夜の名告る「白浪」五人衆　菅原卓郎
雨筋のつつましきかな梔子の花　小林京子
出格子の質屋の通り春日傘　阿部幸代
翠巒や五言絶句をそのままに　丸屋詠子
鎮魂をのせて卯浪の遠ざかる　池田珪子
靴脱いで鈍行列車麦の秋　森下山菜
自動車の空を飛ぶ日やバードデー　皆川更穂
桐の花終着駅をかがやかす　篠﨑紀子
告白やソーダ水の泡が消え　清水桂子
ゆるぎなき靴音はづむ春日傘　山岸久美子
桃源の薔薇のトンネル出れば裟婆　反町修
御座敷に野草しつらへ鮎の宿　霜多光代
寺男皆まで掃かぬ花の塵　本橋稀香
山越えの風を風鈴選びをり　香田裕誌
生垣を茶摘みしてゐる老夫婦　加藤でん治

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和六年八月一日発行　毎月一日発行
（第九十七巻　第八号）　定価　一〇〇〇円